おじょか古墳（志島古墳群 11 号墳）
発掘調査報告

―金属製品編―

２０１６（平成 28）年３月

志摩市教育委員会

序

おじょか古墳は九州系で三重県最古の横穴式石室を持つ古墳で、昭和４４年に三重県の史跡に指定されています。また、石室内に置かれていた埴製枕は、直弧文が描かれた衝立状の装飾を持つ全国的に例がないもので、平成７年に三重県の有形文化財に指定されています。

全国的にも知られた志摩市を代表する古墳であるおじょか古墳ではありますが、古墳から出土した金属製品については、長い間保存処理がなされない状態にありました。この度、寄附金をきっかけとして主な遺物の保存処理を行ったことで、後世に伝え、展示をはじめとした活用ができるようになりました。保存処理の過程で明らかになったことを含め、金属製品についてまとめたのがこの報告書です。

なお、保存処理および報告書の作成にあたり、協力･助言いただいた各位に御礼申し上げます。また、何より保存処理のきっかけとなった寄附をいただいた中村凡彦氏に深く感謝申し上げます。

最後に、本書が多くの方に利用され、新しい歴史を紐解く一助になれば幸いです。

平成２８年３月

志摩市教育委員会

教育長　　前　田　藤　彦

例　　言

1　本書は、三重県志摩市阿児町志島512番地1に所在するおじょか古墳（志島古墳群11号墳）の発掘調査報告書の金属製品編である。

2　保存処理および報告書作成は、次の体制で実施した。

調査主体　　志摩市教育委員会

調査担当　　平成22年度（保存処理）　生涯学習人権教育課　係長　西崎睦美
　　平成23年度（保存処理）　生涯学習人権教育課　主事　荻野珠奈
　　平成24年度（保存処理）　生涯学習人権教育課　技師　三好元樹
　　平成25年度（整理作業）　生涯学習スポーツ課　技師　三好元樹
　　平成27年度（報告書作成）　生涯学習スポーツ課　技師　三好元樹

3　保存処理および報告書作成にかかる費用は志摩市が負担している。

4　保存処理および報告書作成にあたって、下記の方々から有益なご助言を得た。記して感謝申し上げる（五十音順・敬称略）。

石井智大、伊藤文彦、岩原剛、上田直弥、魚津知克、大川操、角正淳子、片山健太郎、河北秀実、税田脩介、鈴木一有、高田貫太、髙松雅文、田村陽一、田村隆太郎、辻田淳一郎、豊島直博、土生田純之、平石冬馬、広瀬和雄、藤村翔、穂積裕昌、松坂悟、間所克仁、右島和夫、水野蛍、宮代栄一、宮原佑治、三好裕太郎

5　写真撮影については、三重県埋蔵文化財センターの写場を利用し、活用支援課の協力を得た。

6　本書で報告した記録類および出土遺物は、志摩市教育委員会が保管している。

7　本書の作成業務は志摩市教育委員会が行った。報告文の作成は、第4章第1節を齋藤努（国立歴史民俗博物館）、第4章第2節を川本耕三（公益財団法人元興寺文化財研究所）、それ以外を三好が行った。編集は三好が行った。

凡　　例

1　実測図断面図は、木質部分を斜線で、鹿角部分を網かけで表現した。

2　計測値は原則として0.5mm単位で計測した。

本文目次

第１章　保存処理の経過・・・

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺物実測図① …… 7
第３図　遺物実測図② …… 9
第４図　遺物実測図③ …… 10
第５図　遺物実測図④ …… 11
第６図　遺物実測図⑤ …… 13
第７図　遺物実測図⑥ …… 14
第８図　遺物実測図⑦ …… 15
第９図　遺物実測図⑧ …… 16
第10図　遺物実測図⑨ …… 17
第11図　遺物実測図⑩ …… 18
第12図　おじょか古墳出土青銅資料の鉛同位体比分析結果（ａ式図）…… 22
第13図　おじょか古墳出土青銅資料の鉛同位体比分析結果（ｂ式図）…… 22
第14図　半球形飾金具（３）表面の繊維らしき痕跡 …… 23
第15図　半球形飾金具（５）の鍍金部分のスペクトル …… 23
第16図　鉾（25）の袋部のスペクトル …… 23

挿表目次

第１表　報告遺物点数の比較 …… 4
第２表　遺物一覧表 …… 5
第３表　刀・剣・槍観察表 …… 19
第４表　鏃観察表① …… 19
第５表　鏃観察表② …… 20
第６表　斧観察表 …… 20
第７表　鉤状鉄製品観察表 …… 20
第８表　おじょか古墳出土青銅資料の鉛同位体比測定結果 …… 21

写真図版目次

写真図版１　方格Ｔ字鏡（１）①
　　方格Ｔ字鏡（１）②
写真図版２　方格Ｔ字鏡（１）Ｘ線写真
　　珠文鏡（２）①
　　刀（６）の茎部
　　刀（11）の茎部
写真図版３　珠文鏡（２）②
　　半球形飾金具
　　半球形飾金具（３）Ｘ線写真
　　半球形飾金具（４）Ｘ線写真
　　刀（６）Ｘ線写真
　　刀（10）Ｘ線写真
写真図版４　刀・剣
写真図版５　刀・槍
写真図版６　刀（16）の茎部
　　剣（20）の茎部
　　鉾（25）の錫装具細沈線
　　斧（95）Ｘ線写真
　　鉾（25）Ｘ線写真
写真図版７　鉾（25）
　　短甲
写真図版８　鏃
写真図版９　斧
　　鎌・刀子・不明鉄製品・鉤状鉄製品

第Ⅰ章　保存処理の経過

第１節　保存処理にいたる経緯

ここで報告するおじょか古墳（志島古墳群 11 号墳）の金属製品は、昭和 42（1967）年に阿児町教育委員会を調査主体とし、三重大学歴史研究会が中心となって行った発掘調査において出土したものである。発掘調査の概要は発掘調査概報としてまとめられている（小玉ほか 1968）。

出土した遺物は地元公民館で長く保管されていた。平成６年７月に阿児町立阿児資料館（阿児ライブラリー２階）（平成 16 年から志摩市立阿児資料館、平成 24 年廃止）が開館するとそこに移され、一部が常設展示された。平成７年度には、珠文鏡の保存処理を行ったが、そのほかの金属製品は未処理のままで、経年変化によって崩壊が進行した。

金属製品の崩壊が危惧されていたものの、費用面の問題などにより保存処理は行われなかった。平成 20 年５月 12 日に、旧阿児町の学芸員であった故中村凡彦氏がその遺志により、志摩市ふるさと応援寄附金制度を利用して、阿児資料館に収蔵されている鉄器類の脱塩・防錆に使途を特定した 3,000,000 円の寄附を行った。志摩市教育委員会では、この寄附金を財源として、国の国宝重要文化財等保存整備費補助金、県の文化財保護事業補助金を受けて、保存処理を実施することとなった。

第２節　保存処理の経過

平成７年に財団法人元興寺文化財研究所（現在、公益財団法人）に委託し、珠文鏡の保存処理と鏃４点、剣３点、槍２点、刀２点、斧５点、鎌２点、刀子１点のＸ線透過撮影を行った。

平成 22 ～ 24 年度の保存処理業務は、指名競争入札の結果、いずれも財団法人元興寺文化財研究所が受託し、実施した。

平成 22 年度には、鏡１点、半球形飾金具１点、鏃 10 点、刀２点、剣２点、槍１点、斧２点、鎌２点、刀子１点、鉤状鉄製品２点の保存処理を行った（契約金額 2,973,600 円）。

平成 23 年度には、鏃１点、刀５点、剣１点、斧３点の保存処理を行った（契約金額 3,305,400 円）。

平成 24 年度には、半球形飾金具２点、鏃 13 点、刀５点、鉾１点、不明鉄製品１点の保存処理を行った。また、金属製品ではない竪櫛１点（中村ほか 1992：Fig.169-11）、織物状有機質１点（Fig.169-13）の保存処理を行うとともに、未処理の鉄製品のＸ線透過撮影を行った（契約金額 3,345,720 円）。

おじょか古墳の出土遺物のうち短甲、鏃、竪櫛などが未処理のままであり、課題として残されている。

第３節　整理作業の経過

保存処理終了後の平成 25 年度に報告書作成のための整理作業を開始した。その過程で、鏃に接合できるものがあることが明らかになった。保存処理を行ったものと未処理のものも接合したため、同一個体中に保存処理を行ったものと、未処理のものが混在することとなった。

可能な限り多くの遺物を図化し、報告するように努めたが、半球形飾金具の破片、鏃の頸部あるいは茎部のみの破片、鋲を持たない短甲の破片については、掲載していない。

平成 27 年 10 月には、宮原佑治氏の協力で、志島古墳群出土遺物の検討会を実施し、県内外の研究者に遺物を実見してもらい、助言を受けた。

なお、遺物の報告は出土状況と併せてなされるべきであるが、現在、昭和 42（1967）年の発掘調査の図面類が所在不明となっており、実現できなかった。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

おじょか古墳は三重県志摩市阿児町志島に位置する。三重県は南北に長く、その中ほどから東に向けて志摩半島が突き出している。志摩半島北側以北は、宮川、櫛田川、雲津川、鈴鹿川といった比較的大きい河川が一定の間隔をあけて伊勢湾に流れ込み、沖積平野が広がる。一方、志摩半島先端部以南は、熊野灘に面し、大きい河川が乏しく、入り江と湾が続く複雑な海岸線となっている。

志摩市は志摩半島の南東端に位置し、北東に安乗崎、南東に大王崎の２つの岬が張り出している。２つの岬の間にあり、緩やかに東に突出する部分が阿児町志島にあたる。その突出部は、南東は市後浜、北西は池田川に流れ込んだと考えられる旧河川による浸食谷に挟まれた、南西から北東方向に伸びる痩せた尾根によって形作られている。その尾根上から南東の海岸部にかけて、志島集落が広がっている。

志島古墳群は志島集落東側、突出部の先端寄りに形成されている。おじょか古墳は海岸から約 140m 入り込んだ、標高約 25m の志島集落の最高所に位置している。

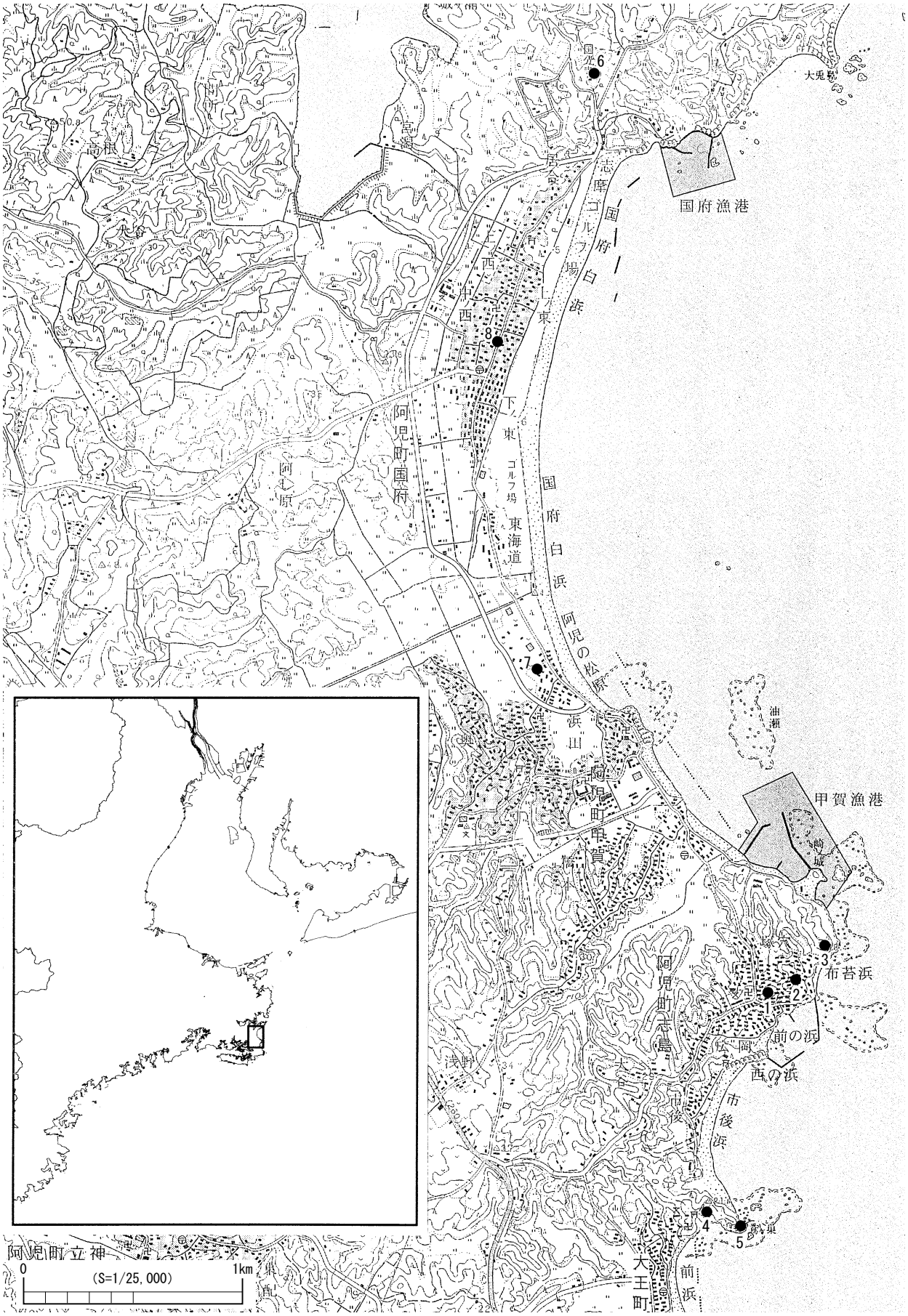
第２節　歴史的環境

志島古墳群にはおじょか古墳（１）（番号は第１図に対応）を含めて 13 基の古墳が確認できたとされる。おじょか古墳は５世紀に築造されたが、その後継続せず、６世紀末以降に再び古墳が築造されるようになる。上村古墳（志島古墳群 10 号墳）（２）は石室は半壊しているが、組合式の箱式石棺が残されている。大正時代に珠文鏡、耳環、玉、銅鋺、馬具、刀、鏃、刀子、金糸、須恵器などの遺物が発見されており、須恵器の特徴から６世紀末頃の古墳と考えられる。塚穴古墳（志島古墳群４号墳）（３）は海蝕崖上に位置しており、長大な石室を持つ。平成 26 年度の石室内の発掘調査では、銅鋺、八角鈴、金銅鈴、耳環、双脚飾鋲などの銅製品、刀、鏃、両頭金具、刀子、釘などの鉄製品、玉、土師器、須恵器などが出土した。須恵器の特徴は７世紀第２四半期頃のものである。

志島古墳群から市後浜を挟んで約１km 南には泊古墳（４）と鳶ヶ巣１号墳（５）の２基の前方後円墳を含む古墳群がある。泊古墳は明治時代に石室から五鈴鏡、馬具、刀などが発見されている。石室は玄門部に段差を持つものの可能性があり（山本 2002）、五鈴鏡は愛知県・志段味大塚古墳出土のものと同型である（深谷 2015）。両古墳とも築造時期は不確かだが、採集された埴輪から５世紀末～６世紀初頭と推定されている（皇學館大学考古学研究会 2002）ことから、おじょか古墳が造られた後、志島古墳群で古墳築造が再開されるまでの間に築かれた古墳と考えられる。

志島古墳群の北４km には奈良時代の志摩国分寺の推定地である志摩国分寺跡（６）がある。志摩国府の所在地は明らかになっていないが、甲賀貝塚（７）周辺や国府貝塚（８）周辺など、志島古墳群と志摩国分寺の間にある国府白浜から阿児の松原までの比較的広い砂浜の沿岸域が推定地とされる。

なお、志摩地域において、おじょか古墳に先行する古墳として、大紀町錦で出土した三角縁神獣鏡（徳田 1992）と志摩市浜島町迫子の前方後円墳の可能性が指摘されている鉄砲塚古墳（皇學館大学考古学研究会 2002）が注目されるが、いずれも詳細は明らかでない。



第１図　遺跡位置図（Ｓ＝１／25,000、『志摩市管内図』を使用）

第３章　遺物

第１節　遺物の概要

おじょか古墳出土の金属製品については、本書以前に小玉ほか（1968）と米田編（1992）において報告されている（第１表）。小玉ほか（1968）では出土した遺物数と出土地点が掲載されており、米田編（1992）では、主要な遺物を報告しているが、本書に含まれない個人蔵のものを含んでいる。

第２表には報告した遺物と米田編（1992）中の中村ほか（1992）と中村（1992）との対応関係および発掘調査における遺物の取上番号と考えられる番号、保存処理とＸ線透過撮影の状況について記載した。保存処理とＸ線透過撮影については、○が実施、×が未実施、△が部分的に実施を示す。

第２節　遺物の観察記録

遺物の計測値については、実測図から行い、主に厚さといった断面図作成位置でのみ確認可能な値についても断面図から計測し、記載した。刀、剣、槍、鏃、斧、鉤状鉄製品については計測値を遺物観察表にまとめた（第３～７表）。観察表で括弧内の値は、残存長であることを示す。

１　鏡（第２図１・２）

１は方格Ｔ字鏡である。方格Ｔ字鏡は方格規矩鏡がもつＴ・Ｌ・Ｖの文様のうち、Ｌ・Ｖの文様が欠落したものである。直径 148.0 ～ 149.0mm、厚さは内区で 1.5mm、外区で 3.5mm である。全体的に文様は磨滅して不明瞭になっていることから、長期間使用されたと考えられる。鈕の直径は 19.0mm、鈕の鏡面からの高さは 8.0mm で、鏡の大きさに対して小さい。鈕孔は円形で鏡面に対して傾斜しており、それぞれ 2.5mm と 0.5mm 鏡面から上位に開いている。鈕孔の上面には紐ずれによると考えられる磨滅が認められる。鈕孔の向きは方格文に対して斜交する。鈕座は、鈕の周りの円形の隆線から４つの葉文が方格文の角に向けて描かれた四葉座である。葉文は、鈕側と突出部側との間で左右に分岐して鈕側に向かい、先端部は丸くなる。葉文のうち２点には分岐部分に小さいくぼみが認められるが、それぞれ位置が若干異なるため、いずれかは錆により生じたくぼみの可能性もある。四葉座の周囲は方格文と同一方向の方形の隆線で囲まれ、その周囲には円座を持つ乳が規則的に 12 個めぐる。その周囲を比較的太い２重の隆線による方格文が取り囲む。方格文の辺の中央部からは同様の隆線によるＴ字文が突き出す。Ｔ字文の両脇には円座を持つ乳が配される。乳の周囲には一部に隆線による文様が認められる。磨滅のため判然としないが、簡素な鳥文と考えられる文様がある。その周囲の内区外帯は圏線によって分けられ、内側は銘文帯、外側は櫛歯文帯となる。銘文帯には「有□人不」の文字が認められることから、「上有仙人不知老」を含む銘文が書かれていると考えられる。櫛歯文帯の櫛歯文は斜交する。外区は内側から鋸歯文帯、２状の波文帯、鋸歯文帯で構成される。縁部はかまぼこ型に膨らむ。なお、乳の一部には銅がはみ出して、円座、更には方格文にまで至っ

第１表　報告遺物点数の比較

		出土位置	1968	1992	本書
鏡	方格T字鏡	玄室奥壁中央	1	1	1
	珠文鏡	玄室入口北側	1	1	1
半球形飾金具		玄室奥壁南側	3	3	3
刀		玄室奥壁中央	3	13(2)	14
		玄室側壁南側	3		
		羨道中央	2		
		天井石直上	4		
剣		玄室奥壁中央	1	2	3
		羨道中央	1		
		羨道奥	1		
		天井石直上	1		
槍		天井石直上	2	2	2
鉾		玄室入口北側	1	1	1
鏃		玄室側壁南側	多数	34(2)	56
短甲		天井石直上	1	0(7)	9
斧		玄室入口南側	2	5	5
		玄室入口北側	3		
鎌		玄室奥壁北側	2	2	2
刀子		天井石直上	1	1	1
不明鉄製品				1	1
鉤状鉄製品				2	5

※1968は小玉ほか（1968）、1992は米田編（1992）
※括弧内の数字は個人蔵のもの
※短甲の点数は1992と 本書は破片数
※不明鉄製品と鉤状鉄製品は本書で新たに設定したが、1992では別の種類として報告されている

第2表　遺物一覧表

番号	種類	米田編1992	取上番号	保存処理	X線写真
1	鏡	Fig.166,167-1		○	○
2	鏡	Fig.168-2		○	○
3	半球形飾金具	Fig.169-4		○	○
4	半球形飾金具	Fig.169-3		○	○
5	半球形飾金具	Fig.169-5		○	○
6	刀	Fig.179-394,397		○	○
7	刀	Fig.179-391,393,398		○	○
8	刀	Fig.179-396		○	○
9	刀	Fig.180-405		○	○
10	刀	Fig.180-404		○	○
11	刀	Fig.180-403		○	○
12	刀			×	×
13	刀	Fig.179-399		○	○
14	刀	Fig.179-400		○	○
15	刀	Fig.179-395		○	○
16	刀	Fig.180-402		○	○
17	刀	Fig.179-401		○	○
18	刀	Fig.179-392		○	○
19	刀			×	○
20	剣	Fig.180-406		○	○
21	剣	Fig.180-407		○	○
22	剣			×	×
23	槍	Fig.180-409		○	○
24	槍	Fig.180-408		○	○
25	鉾	第8図29		○	○
26	鏃	Fig.181-410	玄56,65,66	△	△
27	鏃	第7図7	玄41,49,51,52	△	△
28	鏃	第7図23	玄4,12,13,14,16,18,19,24	×	△
29	鏃	第7図18,19	玄26,28	△	△
30	鏃	第7図5,6		○	○
31	鏃	第7図1,2	玄66,水洗	△	△
32	鏃	Fig.181-426	玄58	△	○
33	鏃		玄23,24	×	○
34	鏃	第7図21	玄49,63	×	△
35	鏃	第7図25		○	○
36	鏃	Fig.181-412		×	○
37	鏃		玄61	×	○
38	鏃	第7図20	玄47	×	○
39	鏃			×	○
40	鏃	Fig.181-413		△	△
41	鏃	第7図11,12,27,28		○	○
42	鏃	第7図9,10	玄61	△	○
43	鏃		玄51,53	×	△
44	鏃	Fig.181-414,421		△	△
45	鏃	第7図3		○	○
46	鏃		玄50	×	×
47	鏃		玄66	×	○
48	鏃		玄51,52,53	×	△
49	鏃	第7図15		○	○
50	鏃	Fig.181-411		○	○
51	鏃		玄32	×	×
52	鏃	Fig.181-416		○	○
53	鏃		玄3	×	×
54	鏃			×	×
55	鏃	第7図16,17	玄44	△	○
56	鏃		玄22,25	×	△
57	鏃		玄20,24	×	△
58	鏃	第7図13	玄66	△	○
59	鏃	第7図4		○	○
60	鏃		玄10,11,21	×	△
61	鏃	第7図26	玄49	△	△
62	鏃		玄15	×	△
63	鏃		玄35	×	○
64	鏃		玄49	×	○
65	鏃		玄46	×	×
66	鏃			×	○
67	鏃		玄17	×	○
68	鏃		玄6,7,8	×	△
69	鏃	第7図22		○	○
70	鏃		玄35,37	×	△
71	鏃	Fig.181-419,425		○	○
72	鏃		玄41,43,48	×	△
73	鏃		玄40,42	×	△
74	鏃	Fig.181-422	玄21,27	△	△
75	鏃		玄60	×	○
76	鏃	Fig.181-420		×	○
77	鏃		玄30	×	○
78	鏃		玄33	×	○
79	鏃		玄40	×	○
80	鏃		玄66	×	○
81	鏃		玄14	×	○
82	短甲			×	○
83	短甲			×	○
84	短甲			×	○
85	短甲			×	○
86	短甲			×	○
87	短甲			×	○
88	短甲			×	○
89	短甲			×	○
90	短甲			×	○
91	斧	Fig.178-387		○	○
92	斧	Fig.178-384		○	○
93	斧	Fig.178-386		○	○
94	斧	Fig.178-385		○	○
95	斧	Fig.178-388		○	○
96	鎌	Fig.178-389		○	○
97	鎌	Fig.178-390		○	○
98	刀子	Fig.181-428		○	○
99	不明鉄製品	第7図14		○	○
100	鉤状鉄製品	Fig.181-424		○	○
101	鉤状鉄製品	Fig.181-427		○	○
102	鉤状鉄製品			×	×
103	鉤状鉄製品			×	×
104	鉤状鉄製品	Fig.181-427		○	○

ているものがあるが、これは鋳造までの過程で生じた何らかの事故の影響と考えられる。

２は珠文鏡である。直径 64.0 ～ 65.0mm、厚さは内区、外区ともに約 2.0mm である。方格Ｔ字鏡ほど磨滅しておらず、文様が鮮明である。鈕の直径は 12.0mm、鈕の鏡面からの高さは 6.0mm である。鈕孔は台形状で、下面は鏡面と同一の高さである。鈕の鈕孔がない部分の片側のみに、鈕に沿って弧を描く隆線が認められる。珠文は約 1.0mm で、概ね３重にめぐるが、一部で乱れる。外区は内側が櫛歯文帯、外側が鋸歯文帯で、鋸歯文は細く、間隔があく。

２　半球形飾金具（第２図３～５）

厚さ約 1.0mm の銅板を半球形に加工し、外面のみに鍍金を施している。３点とも同等の大きさと考えられ、残存状況が良好な３・４を計測すると、長径 28.0mm、短径 23.0mm、高さ 8.0mm である。長軸の両端部には、底面から約 3.0mm の高さに、約 4.0mm の間隔をあけて、径約 1.0mm の２つの小孔があけられている。小孔は内面から押しあけられているらしく、内面側の周囲がくぼむ。

３　刀（第３～５図６～19）

茎部については臼杵勲の分類（臼杵 1984）に基づいて記述した。なお、茎部が全て残存しているものについては、２つの目釘穴が確認できる。

６は切先がふくら付き、刃部はほとんど反らない。茎は「直角片関隅抉尻中細茎」で、関から茎部側に 14.0mm の部分に上底 5.5mm、下底 6.5mm、深さ 3.5mm の小さい台形の茎元抉が認められる。ただし、関部の位置は不明確で、茎元抉の付け根にあたる可能性もある。関部周辺から茎元抉の上端までの範囲には革状の有機物の付着が見られるが鞘に関わるものの可能性がある。把装具は把縁材に二枚合わせの把間材を差し込むものである。茎元抉の上端から茎部側に 44.0mm にわたる直交方向の木質が把縁材で、把縁材の内部には茎部側から約 20.0mm 把間材が差し込まれている。把間は二枚合わせで、「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」（澤田 2008）と判断できる糸巻が行われている。

７は切先がふくら付き、刃部は内湾する。茎は「片関中細茎」であるが、関部と茎尻を欠損する。茎部に幅約 23.5mm の直交方向の木質が認められることから把縁材と判断し、その刃部側の端を関部と判断した。鞘は二枚合わせの合わせ目が確認できる箇所がある。

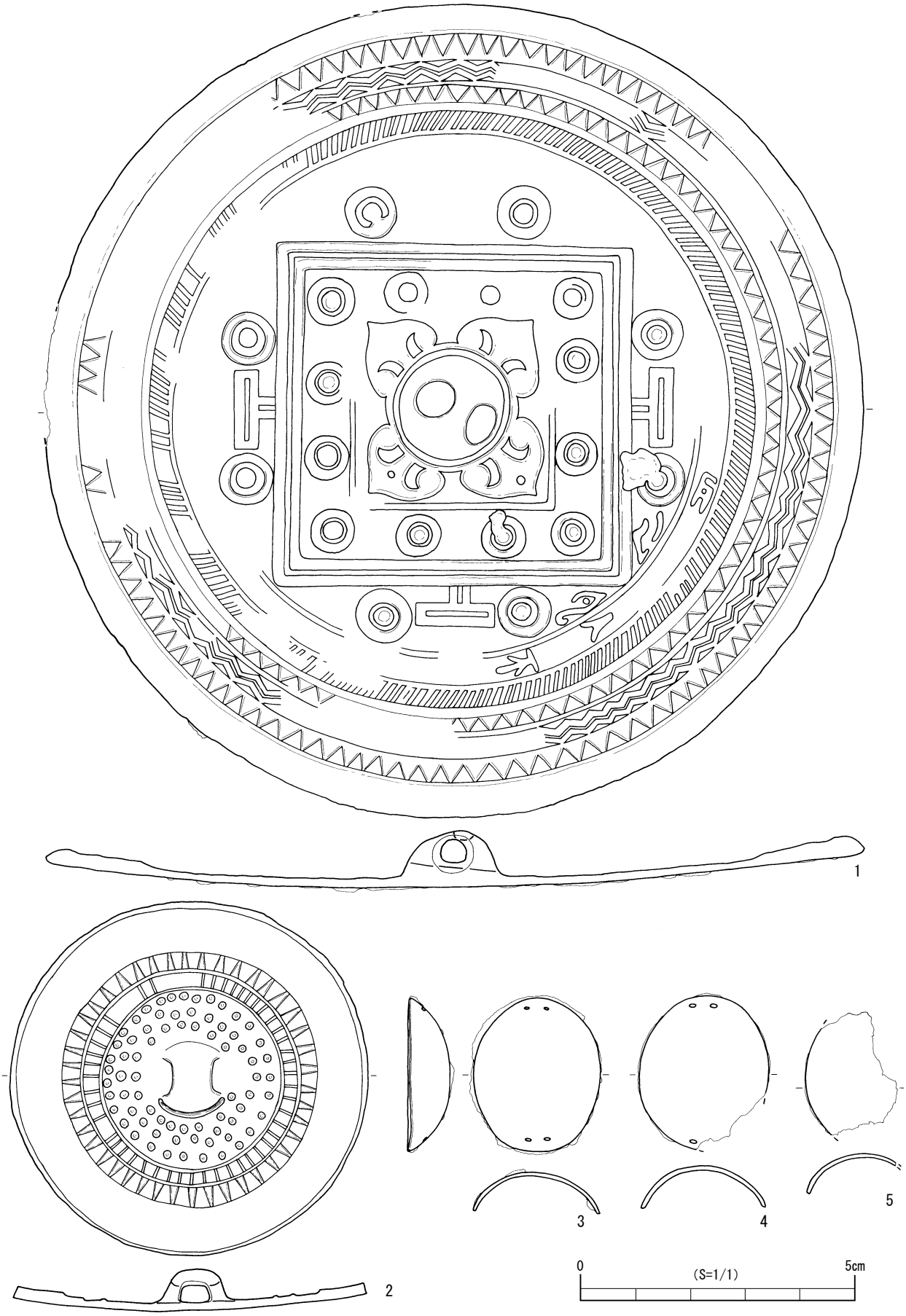
８は切先がふくら枯れ、刃部はほとんど反らない。刃部は外形の多くを失う。茎は「片関一文字尻中細茎」であるが、関部を欠損する。鞘材が無くなる位置を関部と推定した。

９は切先の先端を欠損し、刃部はほとんど反らない。茎は「直角片関一文字尻先細茎」で、茎部側の目釘穴には鉄製と考えられる目釘が残存する。鞘材は関部から刃部側 9.0mm まで残る。関部から刃部側 3.0mm と茎部側 21.0mm に筋状に装具の痕跡がみられるが把縁材に関わるものと考えられる。

10 は先端部を欠損し、刃部は内湾する。現状で刃部の中央に径 4.0mm のくぼみあるいは孔が認められるが、製作時に作られたものかは明らかでない。茎は「片関隅抉尻中細茎」であるが、関部を欠損する。鞘材と考えられる木質が途切れて、6.0mm 茎部側で現れる木質が把材と考えられることから、その部分を関部と推定した。刃部側の目釘穴は不明確である。鞘は二枚合わせの合わせ目が確認できる箇所がある。関部から茎部側に 75mm 程度の位置に横方向の筋状の痕跡が認められるが、装具に関わるものであるかは不明である。

11 は先端部を欠損し、刃部はわずかに内湾する。茎は「直角片関隅抉尻直茎」である。鞘は二枚合わせの合わせ目が確認できる箇所がある。鞘は鞘口が別材で作られており、関部から刃部側 31.5mm までの、表面に黒色の漆が塗られた材が鞘口材と考えられる。鞘口材には 23.0mm の深さの鞘間材の差し込み部があけられており、段差を付けた二枚合わせの鞘間材が 17.0mm 差し込まれている。把は「落し込み式」（豊島 2010）と考えられ、把間には糸巻が行われる。

16 は切先がふくら枯れ、刃部は短い。茎は「直角片関一文字尻先細茎」で、刃部側の目釘穴には鉄製と考えられる目釘が残存する。鞘は二枚合わせの合わせ目が確認できる箇所があり、関部から刃部側へ 7.5mm まで認められる。把装具は把縁材に「落し込み式」の把間材を差し込むものである。関部から茎部側へ 4.0mm からみられる直交方向の木質が



第２図　遺物実測図①（Ｓ＝１／１）

把縁材で、背側で上端から 9.5mm で外向きに強く屈曲することから、別材の把縁突起を取り付けるための突出部の可能性がある。把間材は把縁材に差し込むために先端部 16.0mm が段差をつけて削られている。茎部を落し込んだ後で、茎部に平行する木目の材で穴を埋めている。

17 は先端部を欠損し、刃部はわずかに内湾する。茎は「直角片関中細茎」であるが、茎尻を欠損する。鞘材は関部から刃部側 18.5mm まで残る。関部から茎部側 18mm 程度の位置に筋状の痕跡が認められ、装具に関わるものと考えられる。

12 ～ 14 は刃部片、15･18 は刃部先端部片である。切先は、15 がふくら枯れ、18 がふくら付く。

19 は茎尻片で、「一文字尻茎」で目釘穴が 1 つ認められるが、剣か槍の可能性もある。

4　剣（第 4 ・ 5 図 20 ～ 22）

剣と槍の茎部については池淵俊一の分類（池淵 1993）に基づいて記述した。

20 の茎は「浅直角関中細茎」であるが、茎尻を欠損し、目釘穴が 1 つ確認できる。鞘材は関部から刃部側 4.0mm まで残るが、鞘口部では片方の端部に直交方向の木材を挟み込んでいる。補修などの目的に用いられたものかもしれない。関部から茎部側へ 13.5mm の範囲には鹿角が残っており、把縁材と考えられる。それに接して茎部側には把間材が残されており、断面形は長辺が外反する長方形で、二枚合わせで作られている。

21 の茎は「浅直角関ナデ中細茎」で、目釘穴が２つあり、茎部側の目釘穴には鉄製と考えられる目釘が残存する。鞘は鞘口が別材で作られており、関部から 6.0mm 茎部側まで認められる直交方向の木質が鞘口材と考えられる。関部から茎部側へは鹿角か木か判断が難しい材が認められるが、把縁材と考えられる。鞘口材と把縁材が重複する部分は鞘受部であろう。関部から茎部側へ 25.0mm からは把間材が認められる。

22 は刃部片である。

5　槍（第 5 図 23・24）

両刃で刃部長が短いものについて槍と分類した。ただし、装具からは槍と捉えられる要素は認められないため、剣の可能性もある。

23 は刃部が著しく細い。茎は「ナデ角関 b 」であるが、茎尻を欠損する。鞘は鞘口が別材で作られており、関部から刃部側 1.5mm から 16.0mm に認められる直交方向の木質が鞘口材、関部から刃部側 26.0mm からみられる木質が鞘間材と考えられる。関部から刃部側 1.5mm から茎部側に認められる木質は把材であろう。

24 の茎は「ナデ角関 b 」であるが、茎尻を欠損し、目釘穴が 1 つ確認できる。関部から茎部側に 4.5mm から 22.0mm の範囲に鹿角が認められ把縁材と考えられる。それより茎部側には把間と考えられる木質が残されている。

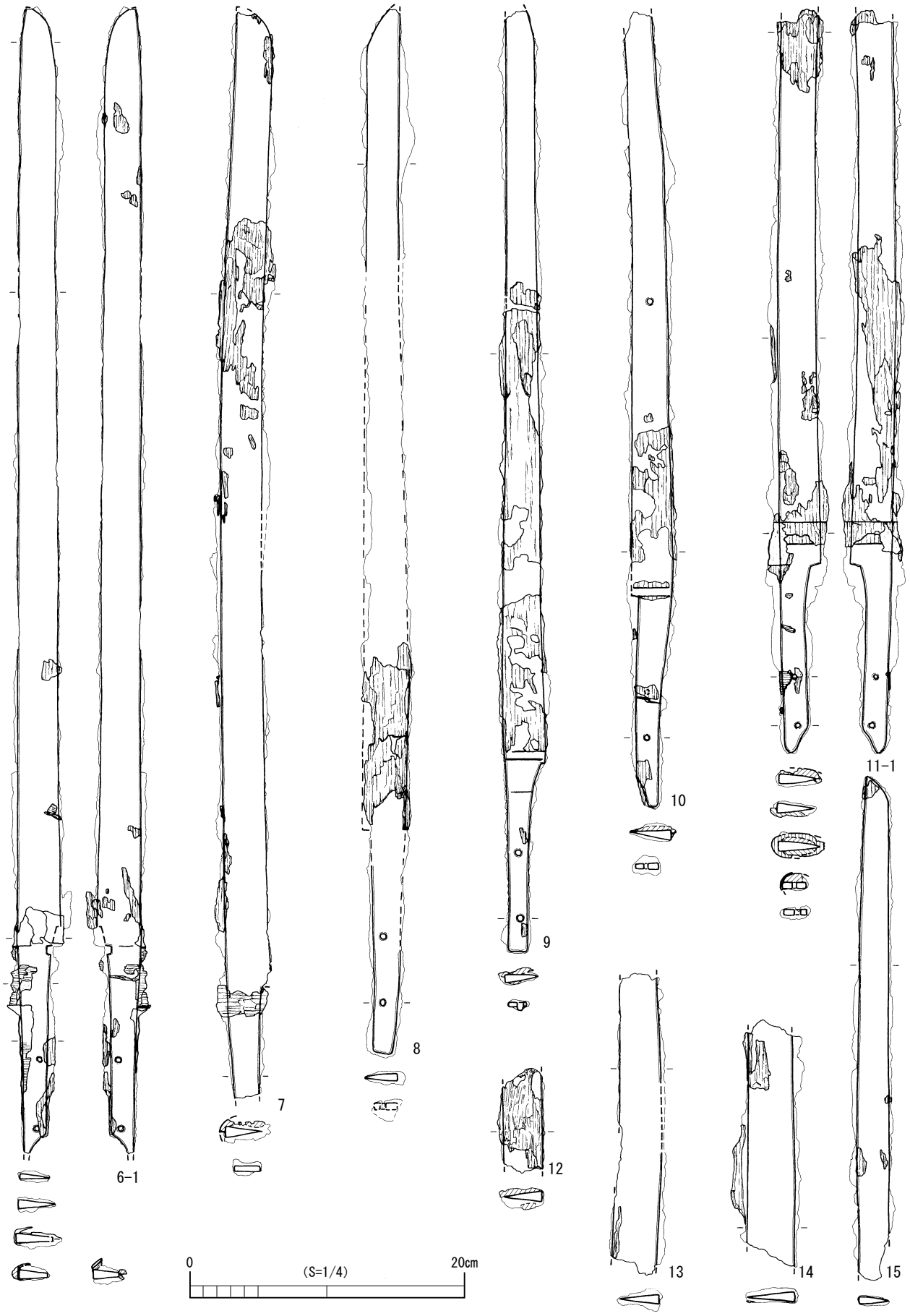
6　鉾（第 5 図 25）

25 は基部に錫の装具を取り付けた鉾である。鈴装具を含めた残存全長は 281.5mm、鉄鉾本体の残存全長は 259.0mm、刃部残存長は 114.0mm、刃部幅は 21.0mm、刃部厚さは 12.5mm、袋部深さは 110.0mm、袋部径は 23.5mm である。刃部は断面菱形の鎬造りで細身である。袋部は断面円形であり、錫装具のため判断が難しいが、袋部端部は直裁となると考えられる。錫装具は 0.5mm 以下の厚さの錫の板を袋部と柄の境界に巻き付けたもので、残存長は 26.0mm、錆によって外径が湾曲しているが、推定される直径は 27.0mm である。錫板は 9.0mm 重ね合わせ、重なる部分を、径 4.0mm、高さ 1.5mm の半円形の頭部を持つ鉄製と考えられる鋲で留めている。錫装具には上端から 15.0mm の高さから下に３条の細沈線が刻まれている。上位と中位の間は 3.3mm、中位と下位の間は 4.1mm 離れる。

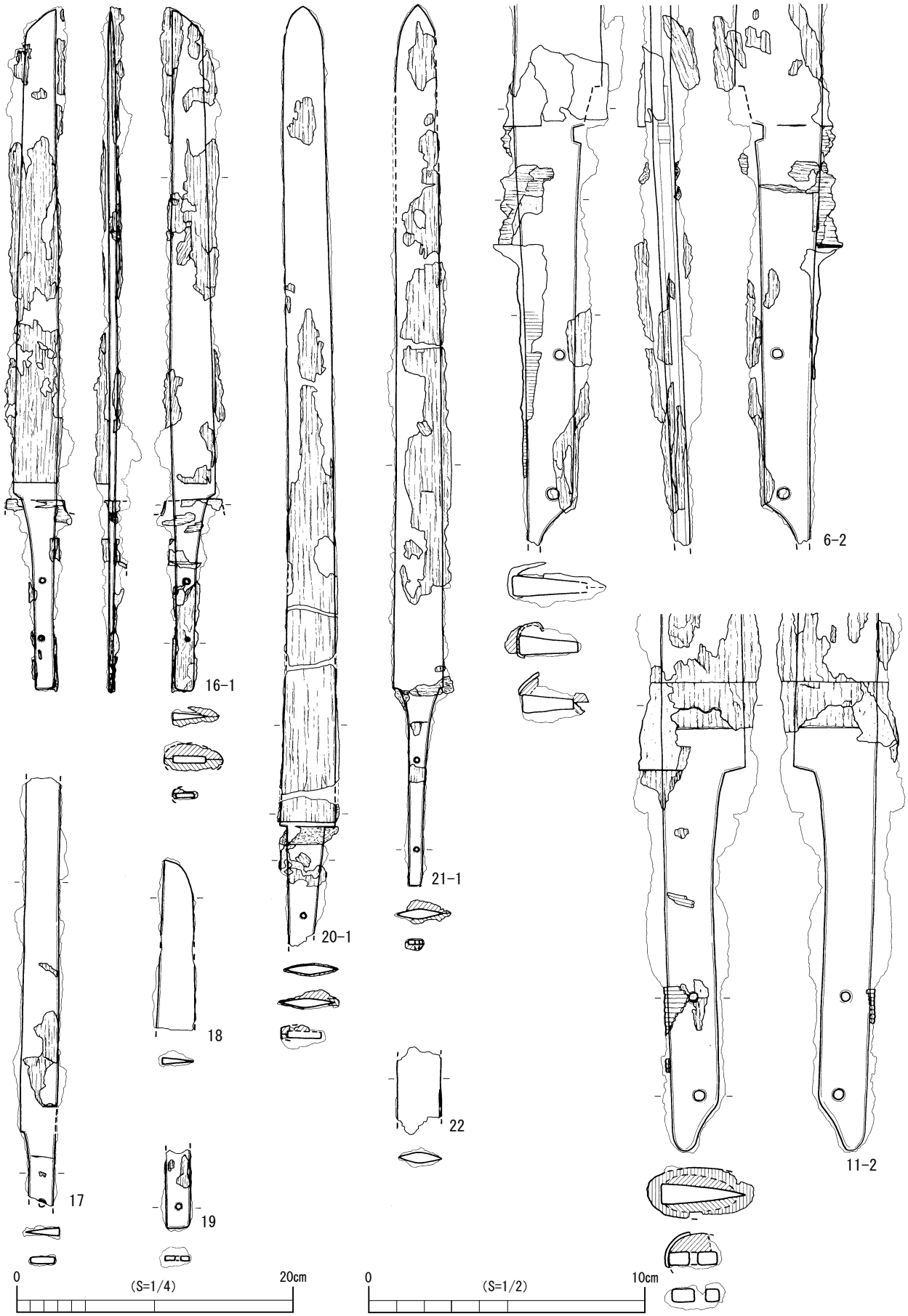
7　鏃（第 6 ～ 8 図 26 ～ 81）

鏃については、頸部あるいは茎部のみの破片以外のものについて図化した。なお、計測値の鏃長は茎部を除く頸部から鏃身部にかけての長さを示す。

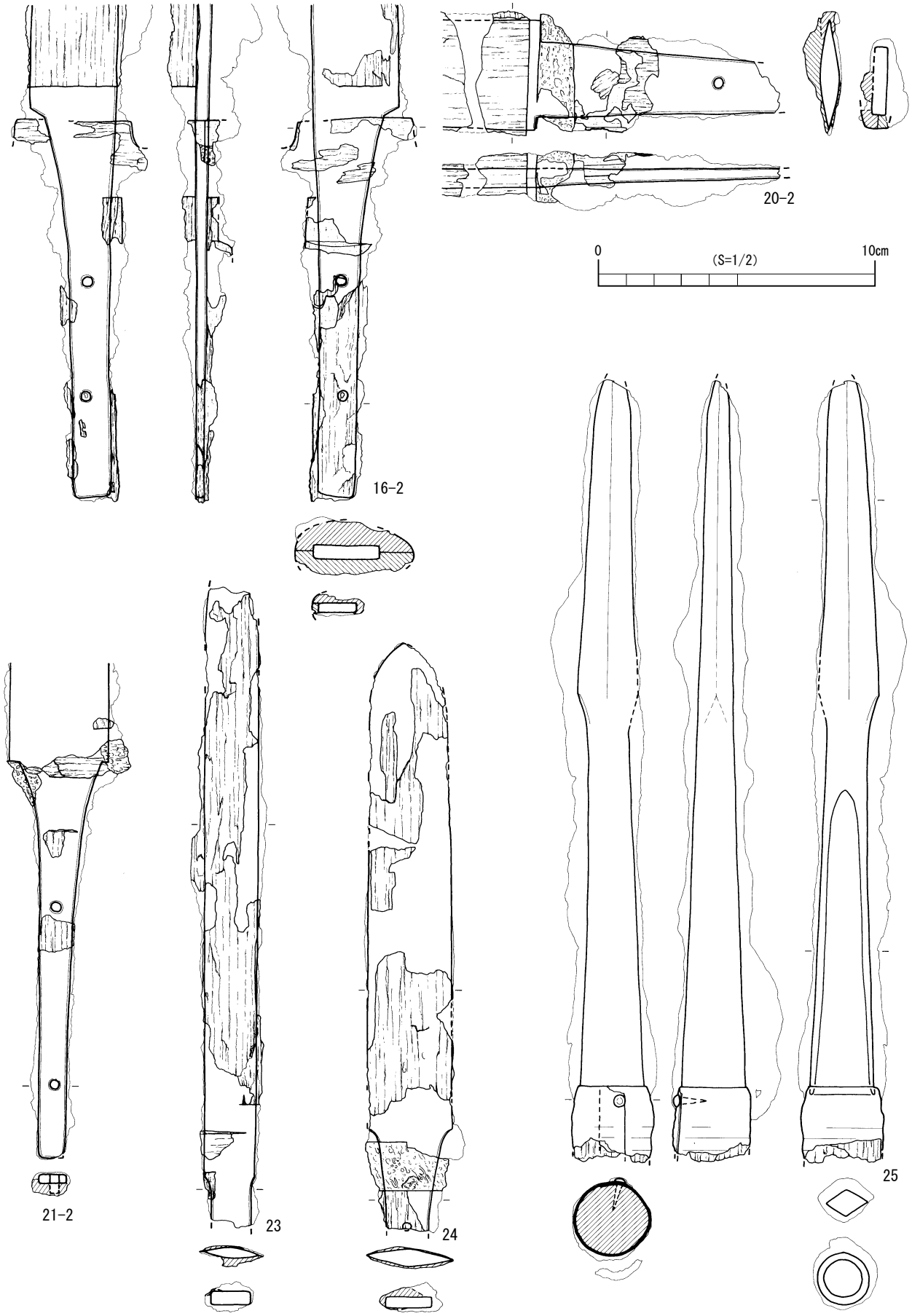
いずれも長頸鏃で、鏃身部の形状から腸抉柳葉形、圭頭形、ナデ関柳葉形、直角関柳葉形の４種類に分類した。腸抉柳葉形は柳葉形の鏃身部で鏃身部側に切れ込む鏃身関を持つものである。圭頭形は鏃の先端で幅が広がり小さい刃部を持つものである。ナデ関柳葉形は柳葉形の鏃身部で、屈曲してなだらかに頸部にいたる鏃身関を持つものである。直角関柳葉形は柳葉形の鏃身部で



第３図　遺物実測図②（Ｓ＝１／４）



第４図　遺物実測図③（16～22：Ｓ＝１／４、６・11：Ｓ＝１／２）



第５図　遺物実測図④（Ｓ＝１／２）

直角の鏃身関を持つものである。鏃身部は銹で観察が難しいものが多いが、片鎬造りが主体となるようである。頸関は、頸部が次第に広がる台形関を中心に、頸部幅が変わらない角関を含む。

26～30は異なる種類の鏃が銹着したものである。鉄鏃の銹着資料は石室内で鏃が長期間置かれていた状況を推定するのに役立つ。26は圭頭形１点、腸抉柳葉形２点、頸部片１点が銹着する。腸抉柳葉形２点は少し高さをずらして並ぶ。圭頭形は腸抉柳葉形と方向は概ね一致するが、高い位置にある。頸部片はそれらと直行する向きで銹着している。更に、別の鏃の矢柄も銹着している。27はナデ関柳葉形と圭頭形が銹着する。鏃身部の向きが約45°の角度で斜交する。ナデ関柳葉形はＸ線写真に「円錐台形」（川畑2010）の矢柄先端部が写る。28は圭頭形とナデ関柳葉形が銹着する。概ね先端部をそろえて並ぶが、鏃長はかなり異なる。圭頭形は頸部上端で折れ曲がっている。29はナデ関柳葉形と腸抉柳葉形が銹着する。少し高さをずらして並ぶ。Ｘ線写真に、ナデ関柳葉形は「円錐台形」、腸抉柳葉形は「円筒形」の矢柄先端部が写る。30はナデ関柳葉形と直角関柳葉形が銹着する。概ね先端をそろえて並ぶ。これらから、一部の鏃は種類が異なるものもそろえて置かれていたことが分かる。

31～39は腸抉柳葉形である。31は概ね先端部をそろえて２点が銹着する。32は腸抉柳葉形と頸部から鏃身部を欠損したものが高さをずらして並んだ状態で銹着する。

40～54は圭頭形である。40は圭頭形２点が銹着するが、鏃身部は約130°ずれる。茎部には茎巻きが認められる。41・42は概ね先端をそろえて並ぶ。41の下方の鏃はＸ線写真に「円錐台形」の矢柄先端部が写る。また、茎部が途中で折れて離れているが、銹が進行する過程で離れていったためなのか、折れた後で差し込み直したためなのか定かでない。42は２本ともＸ線写真に「円錐台形」の矢柄先端部が写る。43は圭頭形に鏃身部を欠損したものが向きを少しずらして銹着する。鏃身部を欠損したものには茎巻きが認められる。44は茎巻きが認められる。45・46はＸ線写真に「円錐台形」の矢柄先端部が写る。48は頸部中ほどに別の鉄鏃の口巻きが斜めに銹着する。49は鏃身部周辺のみが残されているが、向きを少しずらし、先端部をそろえずに銹着する。下位の鏃は頸部が極めて細い。49は鏃身部先端に、52は鏃身部から頸部に鏃と直行する向きの木質が残されている。52は両面を木質に包まれており、鏃が木質に刺さった状態であった可能性がある。

55～66はナデ関柳葉形である。55・56は先端部をずらして、並べられた状態で銹着する。55には鏃に対して斜めに、他の鏃の頸部片と矢柄が銹着する。58は頸部上半に他の鏃の矢柄が斜めに銹着する。58・59はＸ線写真に「円錐台形」の矢柄先端部が写る。62はＸ線写真に「円筒形」の矢柄先端部が写る。

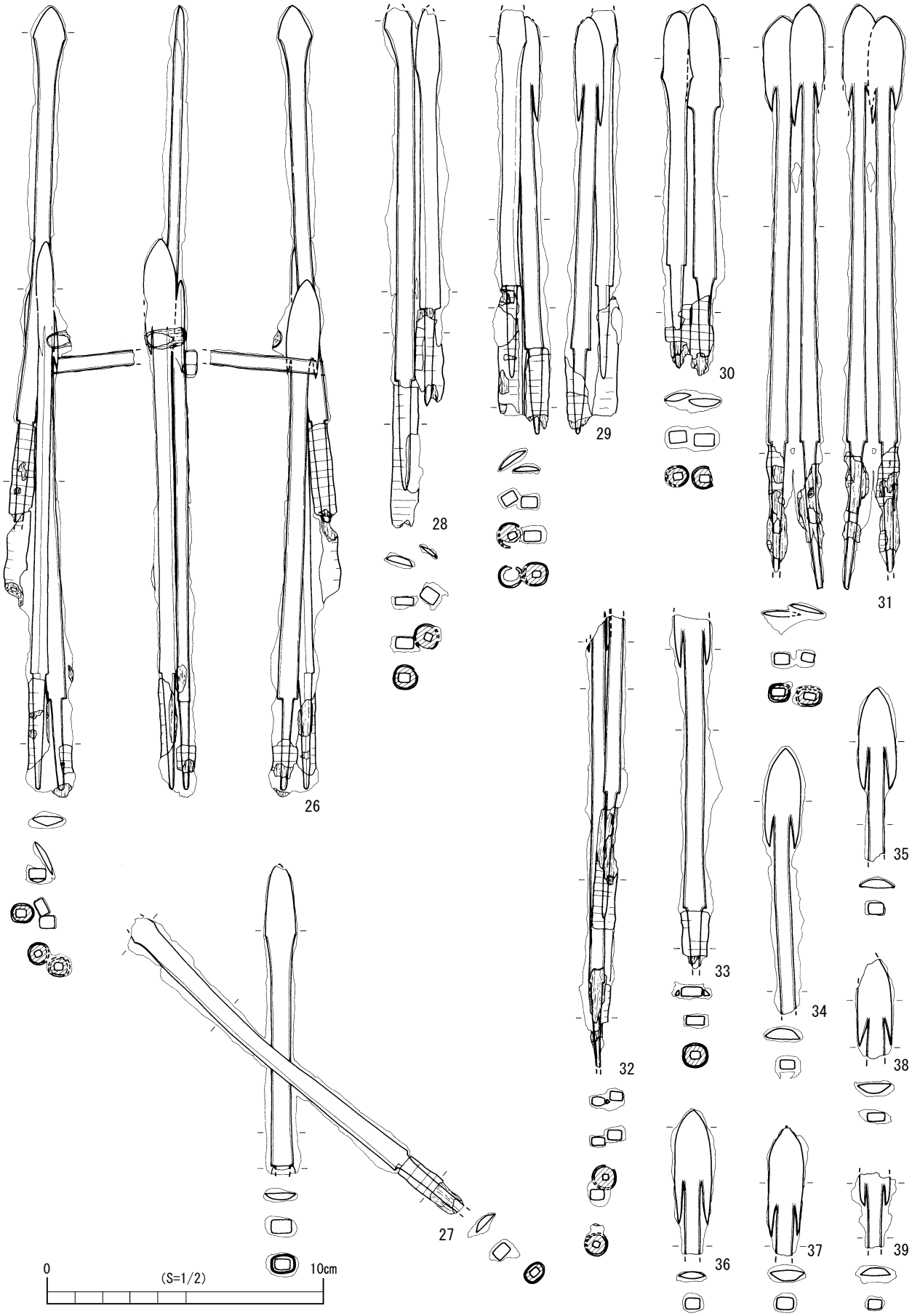
67は直角関柳葉形の可能性があるが、鏃身部の形状は明確でない。茎巻きが認められる。Ｘ線写真に「円錐台形」の矢柄先端部が写る。

68・69は柳葉形の鏃身部先端が別の鏃に銹着したものである。68の頸部から茎部の破片の頸部上端は広がることから鏃身部の近くであると考えられる。Ｘ線写真に「円錐台形」の矢柄先端部が写る。70～80は頸部から茎部にかけて、81は茎部の破片である。74・77・78は茎巻きが認められる。Ｘ線写真に70･77は「円筒形」、71･72･76･79･80は「円錐台形」の矢柄先端部が写る。

8　短甲（第９図82～90）

いずれも破片であるが、もともとは同一個体の三角板鋲留短甲と考えられる。鋲頭径は5.0mmである。鋲は半球形で、内面側ではかしめられると考えられるが、銹のため確認できない。

82・83は反りが少ないため、上下の判断ができない。下段帯金（長側第２段）より、上位の破片と考えられる。83は残存している帯金の幅が39.5mmであるが、鋲の位置から帯金の幅はそれを大きくは上回らないと考えられる。84は左前胴の引合板と裾板（長側第４段）上端を含む破片である。孔は引合板と帯金、地金の３枚留めの位置にある。85は裾板上端と考えたが、鋲から9.5mmに別の孔があけられている。もし両者が同時に使われていたとすると冑である可能性もある。86は下段帯金の下端と考えられる。87は裾板上端と三角板の接合部を



第６図　遺物実測図⑤（Ｓ＝１／２）

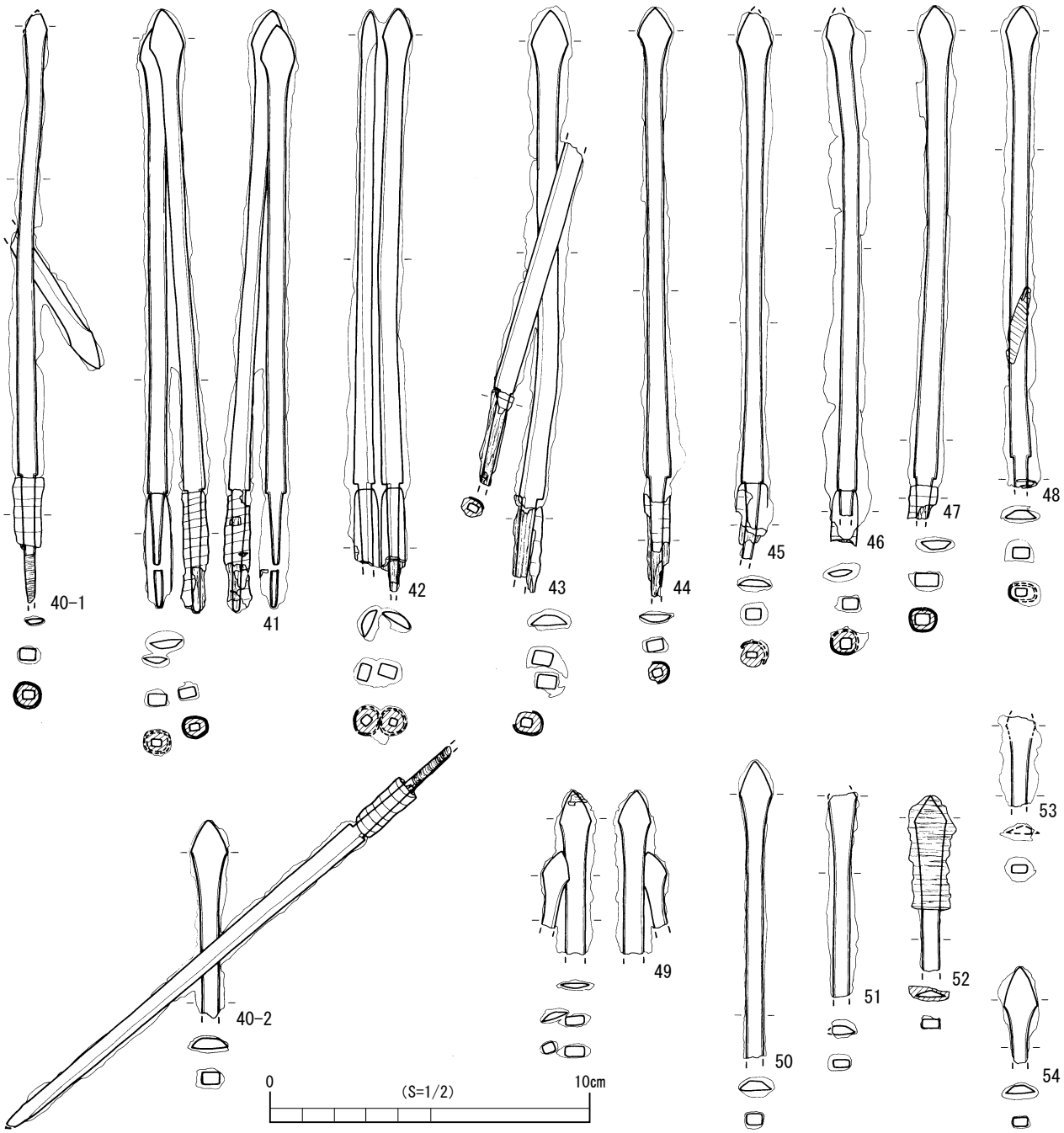
含み、緩やかに曲がることから後胴中央右寄りの破片と考えられる。88 ～ 90 は裾板で、下端には革による覆輪のための径 4.0mm の小孔が 7.0 ～ 8.0mm 間隔であけられている。

残存している部位が短甲の裾部が中心である点は短甲の埋納方法を示唆する。短甲の出土は天井石直上であるとされている。墳丘盛土の流出や撹乱などの理由で土壌とともに遺物片が失われていくとすると、上位から失われていくのが一般的であるので、短甲は天井石上に立位埋納されていたと想定できる。

9　斧（第 10・11 図 91 ～ 95）

91 ～ 94 は無肩鉄斧、95 は有肩鉄斧である。斧は銹の進行による崩壊が最も顕著であった遺物であり、特に刃部において外形などが良好に残存しているものが少ない。袋部は楕円形であるが、92 は合わせ目側が丸みをもち、反対側が平坦である。袋部にはいずれも木質が残されており、94 は柄の表面が部分的に確認できる。

91・93・94 は袋部の合わせ目が開くが、92 は確認できない。91・92 は袋部と刃部の境界付近で外



第７図　遺物実測図⑥（Ｓ＝１／２）

形が屈曲するが、93は直線的である。

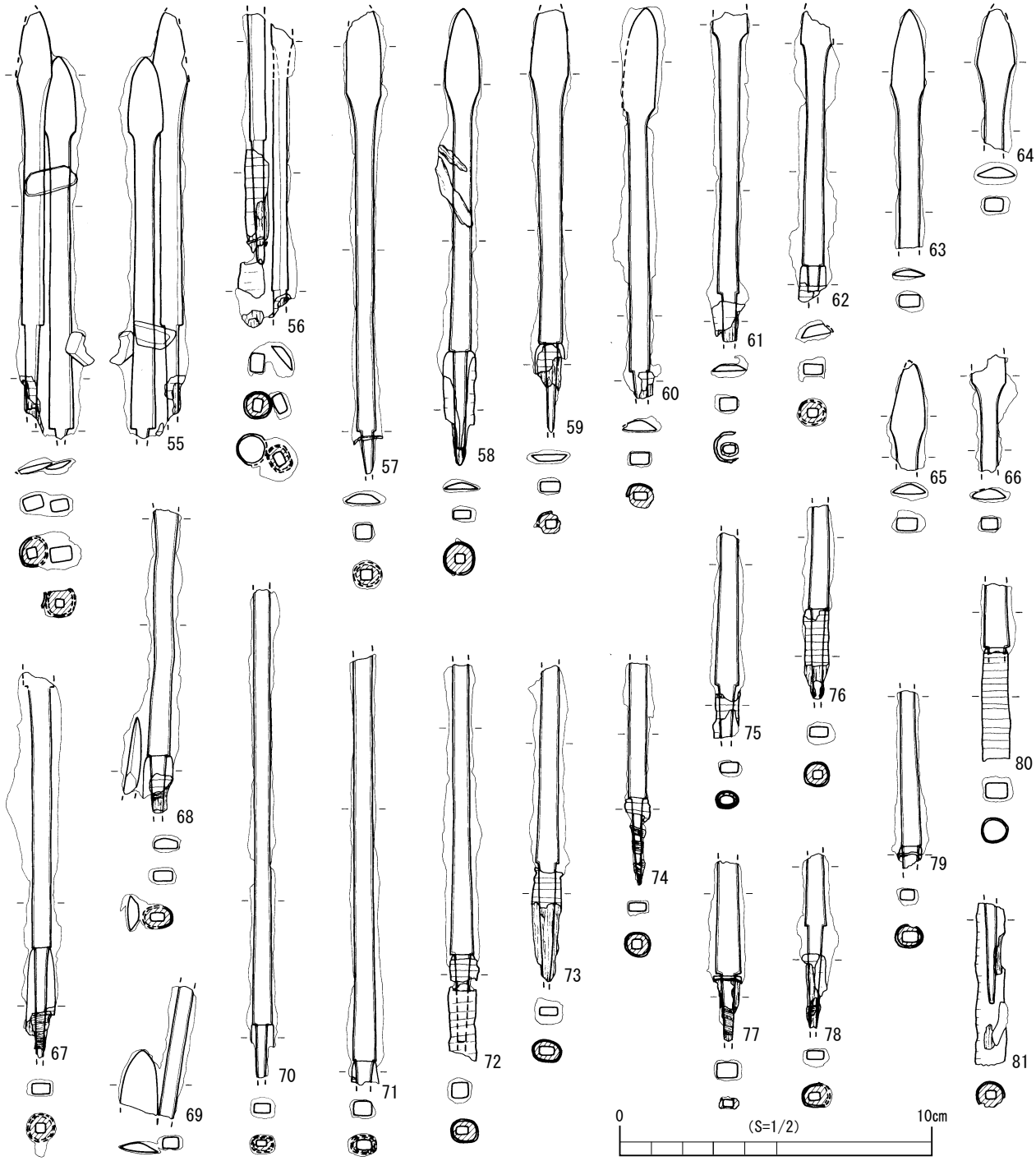
94は袋部の合わせ目が肉眼では確認できない。X線写真の袋部と刃部の境に濃淡による境界が確認できることから、厚い刃部に袋部を鍛接したと考えられる。

10　鎌（第11図96・97）

先端部が屈曲する曲刃鎌である。96は残存長165.5mm、幅42.0mm、厚さ4.0mmである。基部は欠損しているが、近くには刃部と概ね直交する木質が残されている。97は残存長126.0mm、幅29.5mm、厚さ2.5mmである。基部は欠損するが、刃部に直交して、表面側に折り曲げられている。裏面には刃部に直交する幅2.0mmの木質が残されている。

11　刀子（第11図98）

先端部を欠損する。刃部は若干砥ぎ減りしていると考えられる。両関で茎は端部に近づくほど細くなる。鹿角の柄に茎部を差し込む。残存全長56.5mm、



第８図　遺物実測図⑦（Ｓ＝１／２）

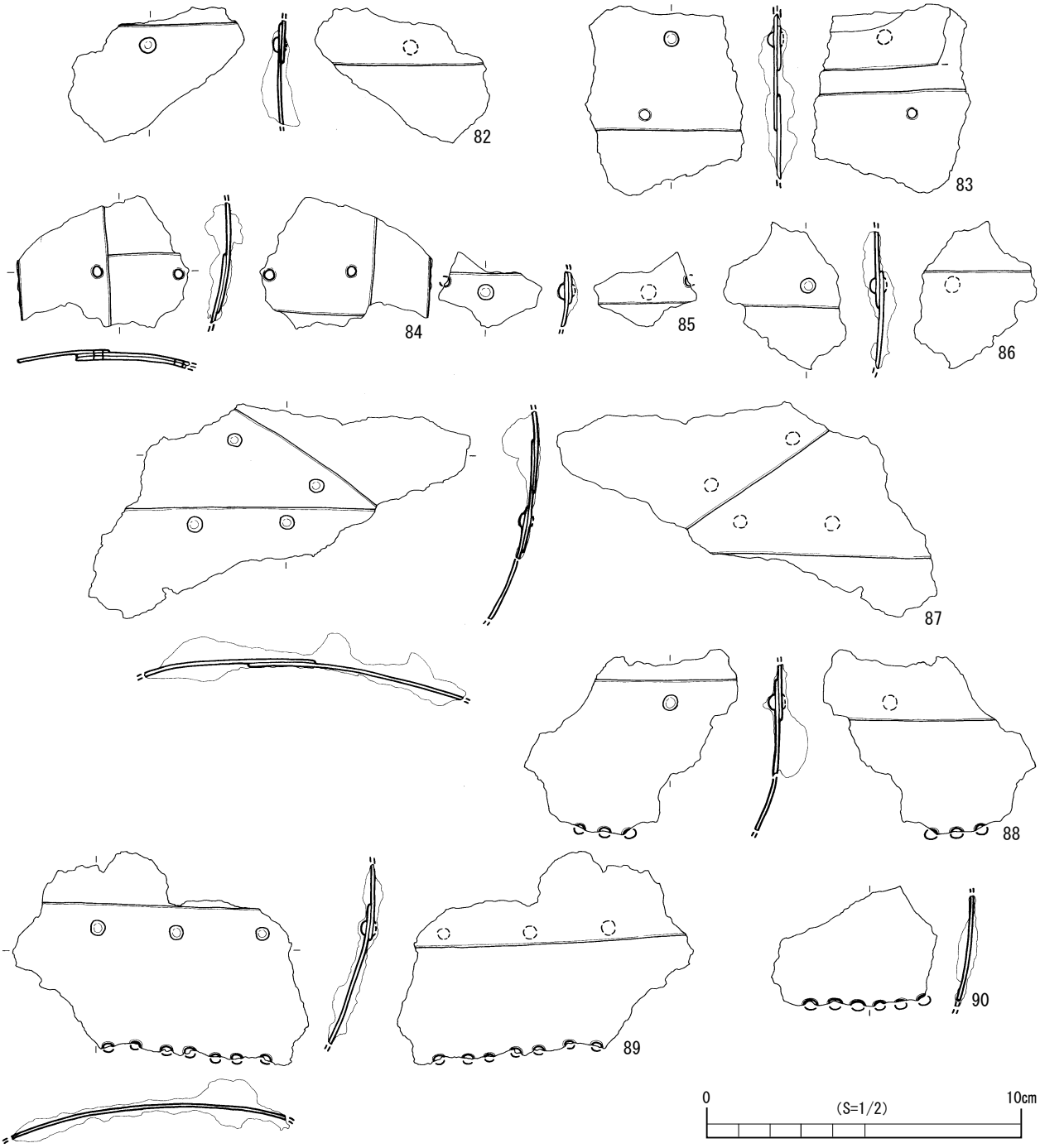
刃部残存長23.0mm、刃部最大幅16.5mm、刃部厚さ3.0mm、茎部長33.5mm、茎部最大幅11.0mm、茎部厚さ2.0mmである。

12　不明鉄製品（第11図99）

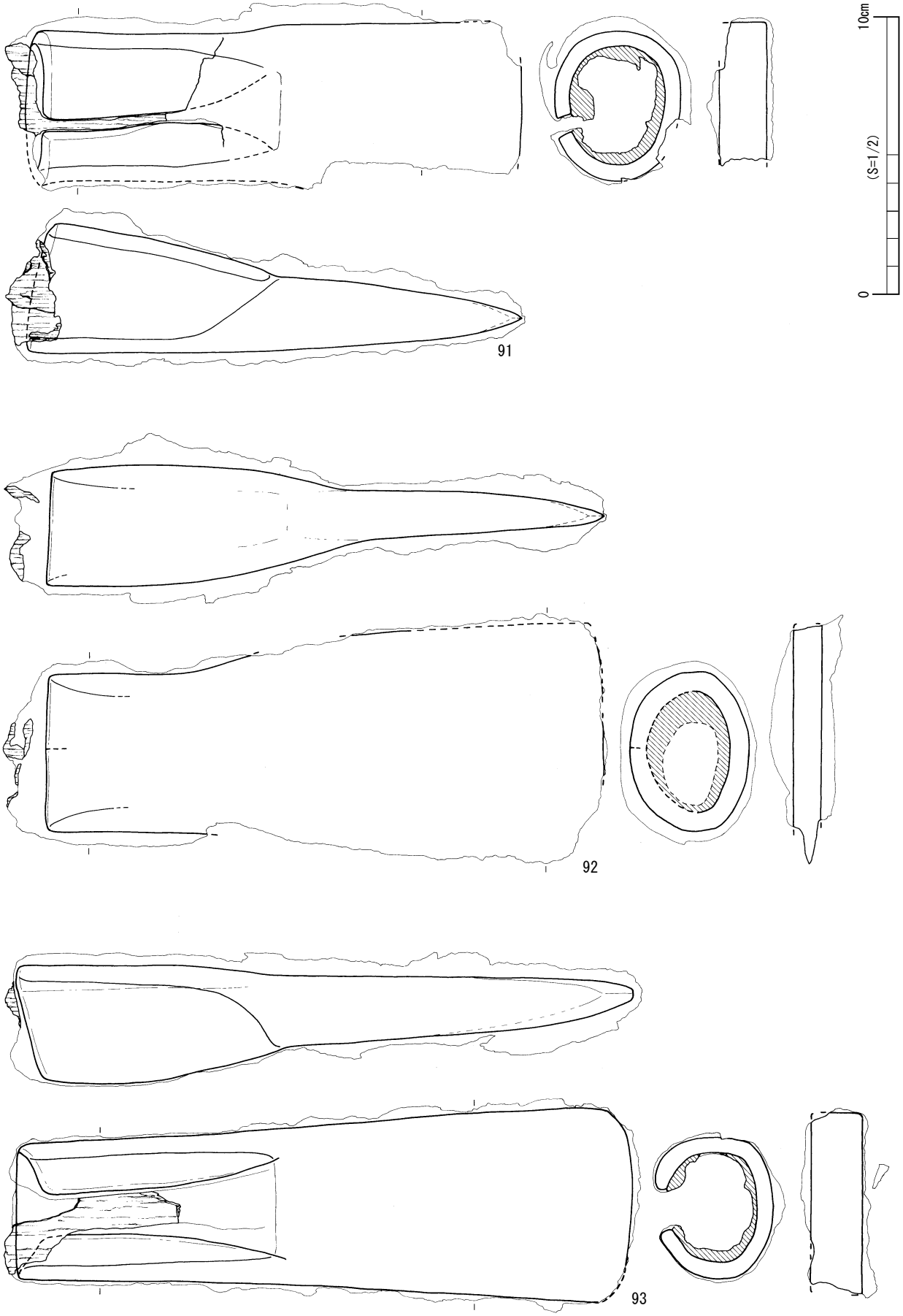
99は用途不明の鉄製品である。幅7.0mm、厚さ2.0mmの断面形がレンズ形の鉄製品が、残存長65.5mm、残存幅18.0mmの断面形が楕円形状の革状のものに差し込まれている。鉄製品は断面で確認できるが、X線写真でもその長さなどははっきりしない。用途は明らかでないが、工具の柄などの可能性がある。

13　鉤状鉄製品（第11図100～104）

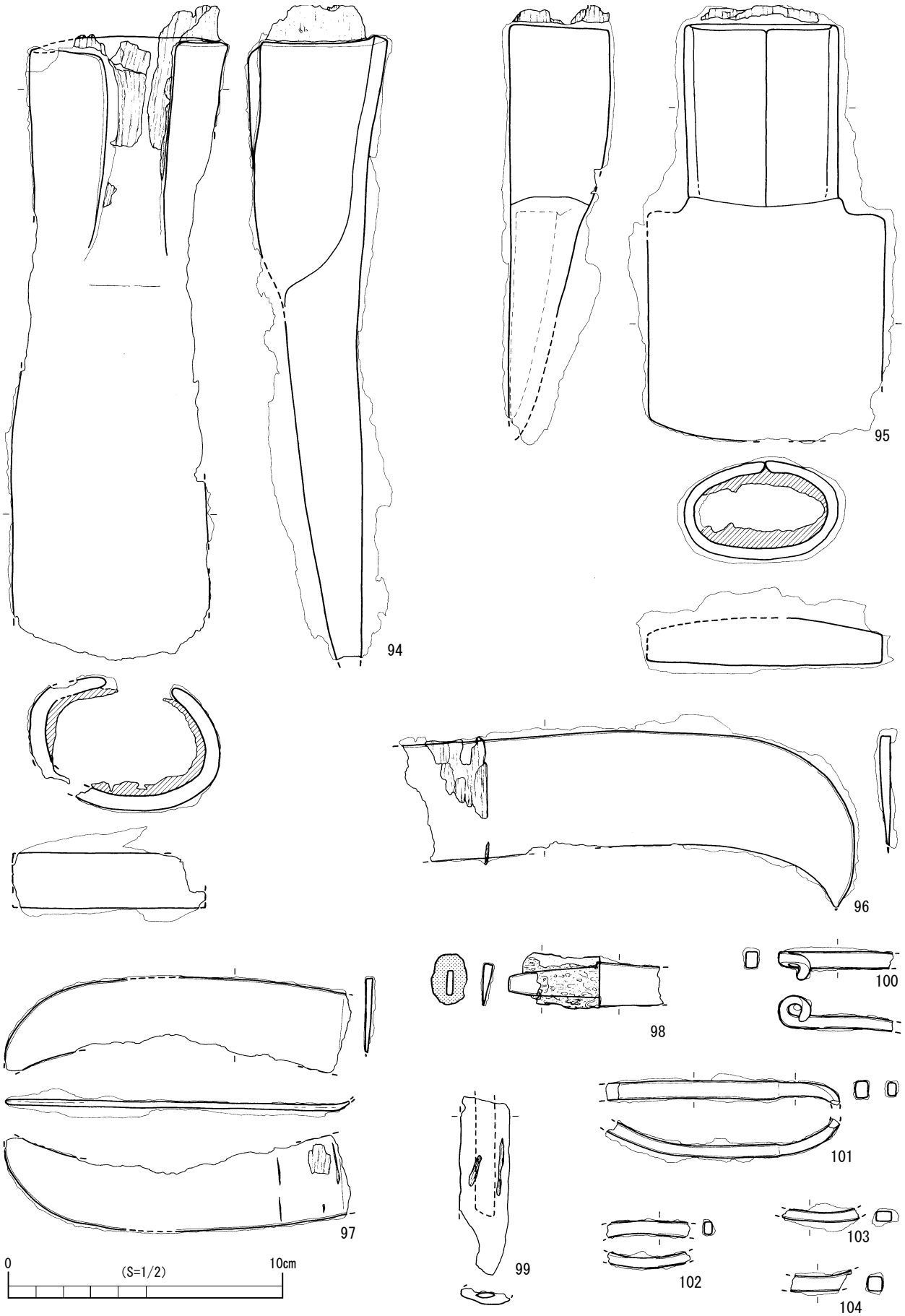
断面が幅5.0～6.5mm、厚さ4.0～5.0mmの方形となる棒状の鉄製品である。残存している部位から全体像を推定すると先端で円を描くように屈曲し、その後は緩やかに弧を描くように曲がると考えられる。100は先端部片で、強く屈曲し円を描く。101は全体として弧を描くように緩やかに曲がる。先端



第９図　遺物実測図⑧（Ｓ＝１／２）



第10図　遺物実測図⑨（S＝1／2）



第11図　遺物実測図⑩（S＝1／2）

部は欠損するが、捻るように曲がることが確認できる。先端部側 22.5mm は細くなる。102 ～ 104 については 101 と同様に弧を描くように曲がる破片であるが、小片のため鏃の頸部片などが含まれる可能性がある。

鉤状鉄製品は石室の石材間に差し込み、布などを垂下するか、武器などを掛けるために用いられたと考えられる。おじょか古墳の鉤状鉄製品は先端が円を描いて屈曲するため、武器を掛けるよりは布を垂下させたと考えるのが妥当だろう。先端が円を描く点で類似するのは群馬県・前二子古墳（前原ほか編 1993、右島 2011）のものであるが、6 世紀初頭の古墳である。おじょか古墳と同じ古墳時代中期の例としては、兵庫県・雲部車塚古墳（坂口編 2010）と福井県・向山 1 号墳（高橋・永江編 2015）があるが、前者は出土状況の記録から、後者は銹着した木質から主に武器を掛けるために用いられたと考えられる。それぞれの断面形は前二子古墳で幅 10mm、厚さ 6mm、雲部車塚古墳で幅 10 ～ 13mm、厚さ 3.5mm、向山 1 号墳で幅 8 ～ 10mm、厚さ 2 ～ 6mm であり、おじょか古墳のものは特に幅において著しく華奢である。そのため、同様の用途の遺物として捉えうるのかという問題は残るが、その形状から鉤状鉄製品と考えた。

第3表　刀・剣・槍観察表　（単位：mm）

番号	種類	全長	刃部			茎部			
			長さ	幅	厚さ	長さ	最大幅	最小幅	厚さ
6	刀	(842.0)	647.5	31.5	7.0	(168.0)	28.5	16.5	7.0
7	刀	(794.5)	(712.5)	32.5	7.5	(82.5)	26.0	18.0	4.5
8	刀	(764.5)	(601.5)	24.0	6.0	163.5		15.5	5.0
9	刀	(689.5)	(550.5)	30.0	6.0	139.0	26.0	14.5	3.5
10	刀	(583.0)	(429.5)	30.0	7.5	154.0	24.5	16.0	5.0
11	刀	(545.0)	(405.5)	30.0	7.5	139.5	22.5	18.0	5.0
12	刀		(77.0)	28.5	7.5				
13	刀		(221.0)	33.0	7.0				
14	刀		(181.5)	35.0	7.5				
15	刀		(367.5)	23.5	5.5				
16	刀	491.0	354.5	31.0	5.5	142.0	25.5	13.0	4.0
17	刀	(310.5)	(257.5)	26.5	6.0	(53.5)	22.5	18.0	5.0
18	刀		(124.5)	27.5	5.5				
19						(18.0)	18.0	17.0	4.0
20	剣	(683.5)	599.5	40.0	8.0	(88.0)	27.0	18.5	6.0
21	剣	642.0	498.5	36.0	7.5	144.5	29.5	10.0	3.5
22	剣		(64.0)	32.0	8.0				
23	槍	(232.5)	(214.0)	19.0	4.0	(18.5)	14.5		5.0
24	槍	(213.5)	(176.5)	30.0	6.5	(37.0)	23.5	15.0	4.0

第4表　鏃観察表①　（単位：mm）

番号	分類	全長	鏃長	鏃身部			頸部			茎部
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ
26a	圭頭形	(188.0)	151.0	11.5	12.0	3.0	139.5	6.0	3.5	(37.0)
26b	腸抉柳葉形	200.0	158.0	42.0	13.5	2.0	126.0	6.0	3.5	42.0
26c	腸抉柳葉形	185.5	152.5	35.5	12.0	4.0	124.0	6.0	4.5	33.0
26d		(39.0)					(39.0)	5.0	4.0	
27a	ナデ関柳葉形	(110.0)	(109.0)	(26.0)	11.0	2.5	83.0	7.0	5.0	(1.0)
27b	圭頭形	(158.0)	(130.5)	(5.5)	10.0	2.5	125.0	6.0	4.0	(28.0)
28a	圭頭形	(175.0)	(135.0)	(7.0)	10.5	2.5	129.0	6.5	3.5	40.0
28b	ナデ関柳葉形	(144.0)	(108.5)	(22.5)	9.5	2.0	86.0	6.0	5.0	35.5
29a	ナデ関柳葉形	(133.5)	(100.0)	(12.0)	12.0	2.0	88.0	5.0	4.0	33.0
29b	腸抉柳葉形	151.0	120.5	39.0	10.5	2.0	95.5	6.0	4.0	28.5
30a	直角関柳葉形	128.0	99.0	37.0	12.0	3.0	62.5	7.5	4.5	29.0
30b	ナデ関柳葉形	129.0	92.0	24.0	11.5	3.0	68.0	6.0	4.0	7.5
31a	腸抉柳葉形	212.0	159.0	43.0	13.0	2.0	130.0	5.0	3.5	53.0
31b	腸抉柳葉形	(201.5)	155.0	34.0	13.0	2.0	129.0	6.0	4.0	(47.0)
32a		(97.5)					(64.0)	5.0	4.0	45.5
32b	腸抉柳葉形	(164.0)		(13.0)			(133.0)	5.0	4.0	(31.0)
33	腸抉柳葉形	(128.5)	(106.5)	(19.0)	13.0	3.5	100.5	7.0	3.5	(22.0)
34	腸抉柳葉形	(97.0)		36.5	13.0	4.0	(71.0)	5.5	3.5	
35	腸抉柳葉形	(6.3)		35.5	14.0	3.0	(40.5)	6.0	4.5	
36	腸抉柳葉形	(52.0)		41.5	13.5	2.5	(27.0)	5.5	4.0	
37	腸抉柳葉形	(46.5)		40.0	13.0	4.0	(18.0)	6.0	4.5	
38	腸抉柳葉形	(36.0)		(31.0)	12.5	3.5	(14.5)	6.5	3.0	
39	腸抉柳葉形	(27.5)		(12.0)	11.0	3.0	(23.0)	5.0	3.5	

第5表　鏃観察表②

番号	分類	全長	鏃長	鏃身部			頸部			茎部
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ
40a	圭頭形	(185.0)	(145.0)	(5.5)	(6.0)	2.0	139.5	5.0	3.5	(40.0)
40b	圭頭形	(62.0)		10.0	11.0	3.5	(52.0)	5.5	4.0	
41a	圭頭形	189.0	151.0	12.0	10.5	2.5	138.5	5.0	3.0	38.5
41b	圭頭形	182.0	146.5	10.0	10.5	2.0	136.0	5.5	4.0	35.5
42a	圭頭形	(182.5)	148.5	8.5	1.0	3.0	140.0	5.5	4.0	(34.0)
42b	圭頭形	(174.0)	148.0	10.0	9.5	3.0	138.0	5.0	3.0	(26.0)
43a	圭頭形	(178.5)	153.5	11.0	11.5	3.0	143.0	6.0	4.5	(25.0)
43b		(110.5)					(80.0)	6.0	4.5	(30.0)
44	圭頭形	(184.0)	147.0	8.0	10.5	2.5	139.0	5.5	3.5	(37.0)
45	圭頭形	(171.0)	(147.5)	(9.0)	11.0	2.0	138.0	5.0	3.5	(24.0)
46	圭頭形	(157.5)	(149.5)	(7.0)	9.0	2.0	142.5	5.0	3.5	(8.0)
47	圭頭形	(161.0)	148.0	9.5	10.5	3.0	139.0	6.0	4.0	(13.0)
48	圭頭形	(150.0)	141.0	8.0	10.0	3.0	133.0	5.0	3.0	(9.5)
49a	圭頭形	(51.0)		9.5	1.0	1.5	(41.5)	6.0	3.5	
49b	圭頭形	(24.0)		8.5	8.0	2.0	(16.0)	4.0	3.0	
50	圭頭形	(93.0)		10.5	10.0	3.0	(82.5)	5.0	4.0	
51	圭頭形	(64.0)		(2.0)	(9.0)	3.0	(62.5)	5.0	2.5	
52	圭頭形	(55.0)		8.0	11.5	2.0	(47.0)	5.5	3.0	
53	圭頭形	(28.5)		(3.0)	9.0	3.0	(2.5)	5.0	2.5	
54	圭頭形	(30.5)		12.5	10.5	2.5	(18.0)	5.0	3.0	
55a	ナデ関柳葉形	(130.5)	100.5	(20.5)	(11.0)	2.0	80.0	6.0	4.5	(30.0)
55b	ナデ関柳葉形	(122.5)	119.0	24.0	11.5	2.0	95.5	7.0	5.0	(3.5)
56a		(80.5)					(40.5)	6.0	4.5	39.5
56b	ナデ関柳葉形	(94.0)	(85.5)	(6.0)	10.5	2.5	79.0	6.0	4.0	(8.5)
57	ナデ関柳葉形	(148.5)	(135.0)	(27.0)	11.5	3.0	108.0	5.5	5.0	(14.0)
58	ナデ関柳葉形	146.5	110.0	25.0	11.0	2.0	84.5	6.0	3.0	37.0
59	ナデ関柳葉形	(135.5)	(107.0)	(21.0)	12.0	2.5	86.0	7.0	3.5	(28.5)
60	ナデ関柳葉形	(125.0)	116.5	32.0	(11.0)	3.5	85.0	6.5	4.0	(8.5)
61	ナデ関柳葉形	(105.5)	(90.0)	(7.0)	11.0	2.0	83.5	6.0	4.0	(15.5)
62	ナデ関柳葉形	(89.5)	(81.5)	(11.0)	(10.0)	3.5	71.0	6.0	3.5	(8.5)
63	ナデ関柳葉形	(76.5)		25.0	11.0	2.5	(51.0)	7.0	4.0	
64	ナデ関柳葉形	(45.5)		(18.0)	12.5	3.5	(27.5)	6.0	4.5	
65	ナデ関柳葉形	(34.0)		(21.0)	11.0	3.0	(13.5)	7.0	4.0	
66	ナデ関柳葉形	(38.0)		(9.0)	11.0	3.5	(29.0)	5.5	4.0	
67	直角関柳葉形	(124.0)	(88.5)	(4.5)	10.0	2.5	84.0	6.0	3.5	(35.0)
68a		(98.0)					(79.5)	6.0	3.0	(18.5)
68b				(24.0)	11.0	4.0				
69a							(42.5)	5.0	4.0	
69b				(21.0)	12.0	3.0				
70		(157.0)					(140.0)	5.0	3.0	(17.0)
71		(138.0)					(130.0)	6.0	4.5	(8.0)
72		(121.0)					(93.0)	5.5	5.0	(28.0)
73		(101.0)					(63.5)	6.0	3.0	(38.0)
74		(71.0)					(43.5)	6.0	3.0	27.5
75		(66.0)					(49.0)	6.0	3.5	(17.0)
76		(62.0)					(33.0)	5.5	3.5	(29.0)
77		(57.0)					(36.5)	6.5	5.0	(21.5)
78		(56.0)					(23.0)	5.5	3.0	(33.0)
79		(57.0)					(50.0)	5.0	3.0	(7.0)
80		(22.5)					(20.5)	7.0	5.0	(2.0)
81										(32.0)

第6表　斧観察表

(単位:mm)

番号	全長	袋部			刃部	
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅
91	179.0	92.0	(54.0)	47.0	87.0	(60.0)
92	201.5	90.0	57.0	44.0	111.0	(87.0)
93	223.0	94.0	52.0	42.5	129.0	70.0
94	(228.0)	91.0	69.5	48.0	(136.5)	72.0
95	152.5	67.0	56.5	37.0	86.0	86.5

第7表　鉤状鉄製品観察表

(単位:mm)

番号	長さ	幅	厚さ
100	(42.0)	6.0	4.5
101	(85.5)	6.5	4.0
102	(30.0)	5.5	4.0
103	(28.0)	6.0	4.0
104	(22.0)	5.0	5.5

第４章　自然科学分析

第１節　おじょか古墳出土青銅資料の鉛同位体比分析結果

１　はじめに

志摩市教育委員会より依頼のあったおじょか古墳出土青銅資料について、二重収束型高分解能ICPマルチコレクター質量分析装置による鉛同位体比分析を行った。

２　資料

分析対象としたのは、おじょか古墳から出土した資料のうち、保存処理に伴って方格Ｔ字鏡（１）から剥離した錆粉末と、半球形飾金具（３）１点である。

３　分析方法

方格Ｔ字鏡は、錆粉末の一部を採取した。半球形飾金具は、刃を使い捨てにするマイクロナイフを使って表面から微少粉末を採取して分析試料とした。これらの試料粉末から高周波加熱分離法（齋藤 2001）で鉛を単離し、希硝酸で溶解してICP発光分光分析法で鉛の回収量を測定した。その結果に基づき、鉛200ppbおよび同位体分別効果補正用のタリウム50ppbとなるように、3％硝酸溶液1.5mlに調製した。二重収束型高分解能ICPマルチコレクター質量分析装置（Thermo Fisher Scientific製NEPTUNE）を用いて、鉛同位体比を測定した。なお、試料の同位体比を求めるにあたり、同様に調製した鉛標準試料（NIST 981）とタリウムの混合溶液によって補正を加えた。

４　分析結果

鉛同位体比分析の結果を第８表と第12・13図に示した。馬淵・平尾は弥生時代から平安時代までの多くの青銅器について鉛同位体比のデータを蓄積した結果、その変遷を下記のようにグループ分けできると報告している（馬淵・平尾 1982、1983、1987）。

Ａ：弥生時代に将来された前漢鏡が示す数値の領域で、華北の鉛。弥生時代の国産青銅器の多くがここに入る。

Ｂ：後漢･三国時代の舶載鏡が示す数値の領域で、華中～華南の鉛。古墳出土の青銅鏡の大部分はここに入る。

Ｃ：日本産の鉛鉱石の領域。

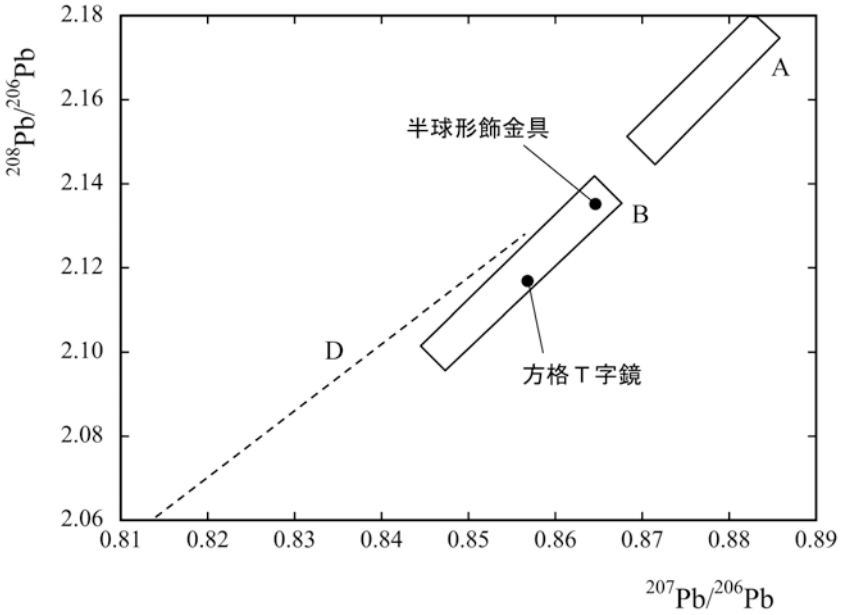
Ｄ：多鈕細文鏡や細形銅剣など、弥生時代に将来された朝鮮半島系遺物が位置するライン。

測定結果の表示には通常$^{207}Pb/^{206}Pb$比と$^{208}Pb/^{206}Pb$比の関係（ａ式図）が使用されることが多く、それだけで識別が困難な場合などには、必要に応じて$^{206}Pb/^{204}Pb$比と$^{207}Pb/^{204}Pb$比の関係（ｂ式図）が併用される。本報告では、Ａ、Ｂ、Ｄの領域とともに両図を表示した。

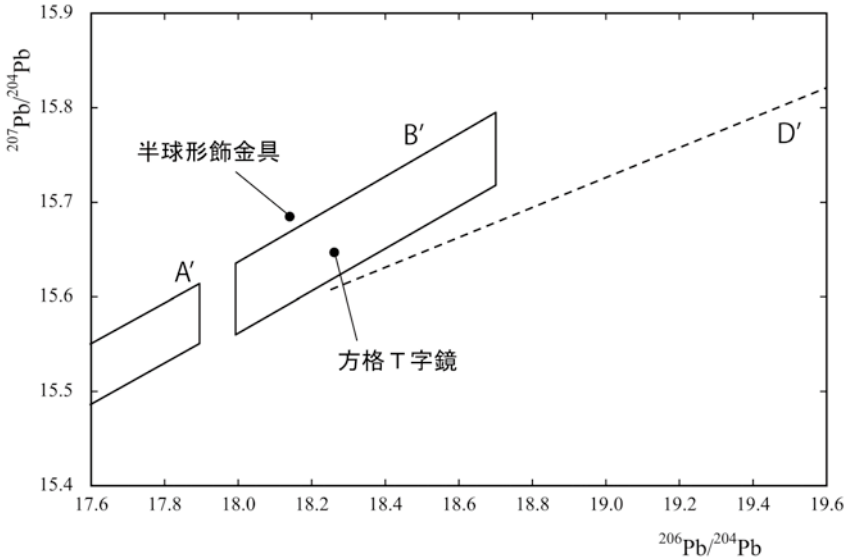
分析した資料はいずれもＢ領域内およびその近接域にあることから、中国の華中～華南地域産原料が使用されたと推定される。

第８表　おじょか古墳出土青銅資料の鉛同位体比測定結果

資料名	分析番号	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$
方格Ｔ字鏡	B14301	0.8568	2.1169	18.261	15.647	38.656
半球形飾金具	B14302	0.8646	2.1352	18.140	15.685	38.732



第12図　おじょか古墳出土青銅資料の鉛同位体比分析結果（ａ式図）



第13図　おじょか古墳出土青銅資料の鉛同位体比分析結果（ｂ式図）

第２節　志摩市おじょか古墳の出土遺物の分析について

１　分析対象

志摩市おじょか古墳出土、半球形飾金具（３）、半球形飾金具（５）、鉾（25）

２　分析内容

実体顕微鏡システムを用いた半球形飾金具（３）表面の拡大観察と、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を用いた半球形飾金具（５）表面の鍍金、鉾（25）袋部の定性成分分析を行った。

３　使用機器および分析方法

◆　エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置(XRF)【SII ナノテクノロジー（株）SEA5230】試料にＸ線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光Ｘ線を検出することにより元素を同定する。

モリブデン（Mo）のＸ線管球を用いて、コリメータφ 1.8mm、管電圧 45kV で 180 秒間測定した。

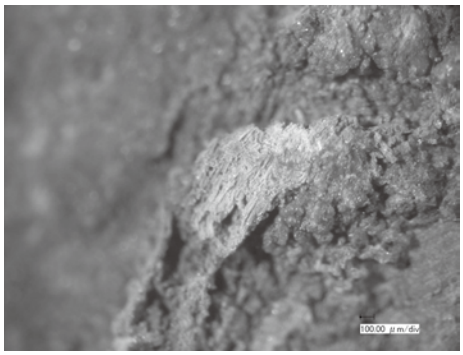
◆　実体顕微鏡 ライカ MZ

◆　マイクロスコープ キーエンス VH-7000S

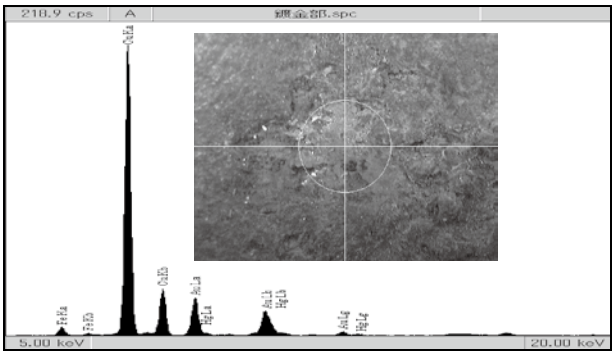
４　分析結果

拡大観察（第 14 図）の結果、半球形飾金具（３）表面には繊維らしき痕跡が観察された。次に、半球形飾金具（５）の鍍金部分を成分分析（第 15 図）したところ、銅（Cu）、金（Au）、水銀（Hg）などの元素を検出したことから、銅の地金に鍍金が施されていると考えられた。

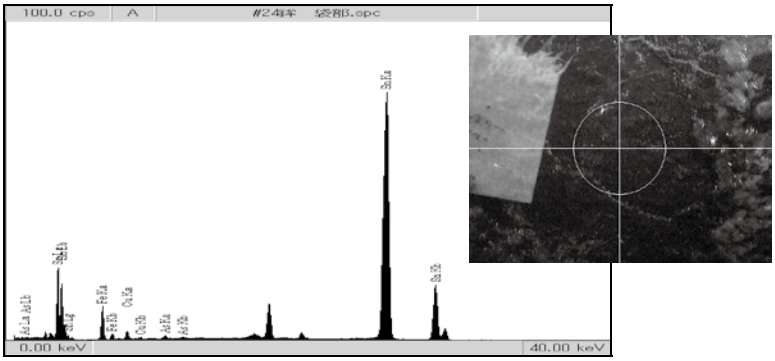
また、鉾（25）の袋部の成分分析を行ったところ、スズ（Sn）を強く検出したため、スズが用いられていることがわかった。



第 14 図　半球形飾金具（３）表面の繊維らしき痕跡



第 15 図　半球形飾金具（５）の鍍金部分のスペクトル



第 16 図　鉾（25）の袋部のスペクトル

第５章　総括

第１節　おじょか古墳に関するこれまでの研究

１　石室に関する報告と研究

昭和 32（1957）年頃から、周囲の宅地の造成によって、おじょか古墳の石室外面は露出し始めたが、昭和 35（1960）年の伊勢湾台風によって大きく露出した。昭和 36（1961）年には石室の一部が崩されて、遺物が回収された。伊藤保は聞き取りと実見によってその状況をまとめ、石室の構造についても記載しているが、未だ羨道部を確認しておらず、竪穴式石室と認識している（伊藤 1966）。

昭和 42（1967）年に行われた発掘調査については、昭和 43（1968）年に調査概要が発行された。調査概要では石室が横穴式石室であることとともに、佐賀県・関行丸古墳をはじめとした北九州の初期の横穴式石室と類似すると考えられている。古墳の時期は５世紀後半で、多人数が短期間に埋葬されたとの考えが示された（小玉ほか 1968）。

更に、平成 14（1992）年に『紀伊半島の文化史的研究』において石室は再実測された（中村ほか 1992）。

発掘調査以降、おじょか古墳の石室は多くの研究に取り上げられるようになる。それぞれおじょか古墳の系統的位置付けに関わる部分のみを取り上げると、肥前から肥後南部に認められる石室、特に佐賀県・関行丸古墳に類似（柳沢 1980）、中・北部九州から直接的な伝播で、特に関行丸古墳に類似（土生田 1980）、九州からの直接的な移入で、形態的には福岡県・真浄寺２号墳１号石室と関行丸古墳の間、５世紀第３四半期ごろに位置付けられる（柳沢 1982）、肥前地方の影響（河野 1982）、５世紀後半で、石室プランと石障から肥後型の熊本県・ヤンボシ塚古墳と類似するが、肥後南部のみの影響とは考えられず、腰石が壁面から離れて石障状をなす佐賀県・目達原大塚古墳を含む肥前南部からの影響が考えられる（森下 1987）、北部九州型と肥後型石室が混ざり、有明海北側沿岸とその周辺にその系譜を求めうる（中村 1992）、西日本の主に地域の有力古墳に採用される、北九州型と肥後型の折衷形式である筑肥型（柳沢 1993・2005）、福岡県・釜塚古墳の石室にまぐさ石と石障を追加した形状（服部 1993）、釜塚古墳などの玄界灘周辺から有明海北岸にかけた北部九州系石室の影響（竹内 2008）、関行丸古墳などに近く、肥前地域からの直接的影響（古城 2009）、平面形・立面形、板石による壁体などが釜塚古墳に近似（藤井 2009）、屍床を持つ目達原大塚古墳の石室構築技法が伝わる（重藤 2015）、などがある。

２　遺物に関する報告

石室露出以前に円筒埴輪が採集されていた（鈴木 1936）がそれほど注目されなかった。石室露出直後に石室から取り出された埴製枕は類例の乏しい遺物として紹介された（伊藤 1966）。

発掘調査概要では、発掘調査で出土した遺物の点数と出土状況図が示されるとともに、埴製枕の実測図が掲載されたが、多くの遺物は長く実測図が公開されなかった。

『紀伊半島の文化史的研究』では、多くの遺物について報告され（中村ほか 1992）、更にそれぞれの遺物について検討し、おじょか古墳の位置付けが行われた（中村 1992）。

更に、豊田祥三は三重県の埴輪をまとめる中で、おじょか古墳の埴輪を図化し、５期（TK23 ～ TK10 型式期）に位置付けた（豊田 2001）。

皇學館大学考古学研究会は玉類について図化し、報告した（皇學館大学考古学研究会 2002）。

第２節　遺物の年代と系統

ここではおじょか古墳で出土した遺物の年代と系統について考えたい。

１　鏡

方格Ｔ字鏡（１）は伝宮崎県･住吉横穴墓群（蓮ヶ池横穴墓群）発見とされる吾作銘帯方格Ｔ字八鳳鏡と同一意匠のものである可能性が高い。この鏡は内区外帯に「吾□□□□□好　上有仙人不知老　□子□□」の銘文を持ち、方格銘に「吾作　知老　長宜

子孫　位至無極」を持つ。おじょか古墳の方格Ｔ字鏡で観察可能な文様と比べると銘文と方格文、鳥文の位置関係が一致しており、「不」の字に近いＴ字文の縦棒が左に片寄る点も同様である。その他の特徴も概ね一致しているようにみえることから、同様の型を用いた鏡と考えられる。おじょか古墳の方格Ｔ字鏡には乳の周囲にはみ出した銅が認められることから、より後の段階で鋳造されたものと理解できる。松浦宥一郎は、方格Ｔ字鏡が九州地方に集中して分布することを示し、その大半を倭製鏡と考えた（松浦 1994）。一方、車崎正彦は伝住吉横穴墓群（蓮ヶ池横穴墓群）の吾作銘帯方格Ｔ字八鳳鏡を西晋製鏡と考え、方格Ｔ字鏡の中で古い段階のものと捉えている（車崎 2002）。ただ、いずれにせよ九州地方に分布の中心があることは間違いない。

珠文鏡（２）は森下章司の４式（森下 1991）であり、５世紀以降の倭製鏡である。

２　半球形飾金具

石川県・和田山５号墳と岐阜県・冬頭山崎２号墳で同様の長軸両端部に２つの小孔をあける遺物が出土している。TK216 ～ TK208 型式期の和田山５号墳のものは長径 30mm、短径 25mm、TK47 型式期の冬頭山崎２号墳のものは長径 28mm、短径 24mm であり、大きさも類似する。一方、出土状況からは、和田山５号墳では被葬者の腰部分で３点出土しており、腰飾に使用されたと考えられるのに対して、冬頭山崎２号墳では６点が剣の曲革の装飾として用いられたと考えられる。いずれにせよ小孔に糸を通して別の素材に結わえ付けて用いられた飾金具と考えられるが、出土点数からは和田山５号墳と同様の利用が想定される。

３　刀・剣・槍

おじょか古墳の刀に含まれる茎の形は、「直角片関隅抉尻直茎」が５世紀代、「直角片関隅抉尻中細茎」が５世紀後半、「直角片関一文字尻先細茎」が６世紀前半の年代が与えられる（臼杵 1984）。６は茎元抉を持つが、茎元抉は中期前半に出現し、中期中葉以降に普及する（鈴木 2012）。剣に含まれる茎の形は「浅直関ナデ中細茎」が４世紀末～５世紀中葉、「浅直関中細茎」が５世紀後半の年代が与えられる（池淵 1993）。また、三重県内の古墳に副葬される刀剣類は、中期中葉から後葉への移行に伴い剣・槍中心から刀中心になるが、おじょか古墳は後者に位置付けられる（鈴木 2005）。

４　鉾

錫装鉾はこれまでほとんど例が知られておらず、唯一のものが熊本県・マロ塚古墳出土のものであった（杉井・上野編 2012）。マロ塚古墳の錫装鉾は大形の鉄鉾に、山形抉りに合わせた中空の装飾を付けたものでおじょか古墳のものとは形態が大きく異なる。袋部末端近くに板状の別素材を巻きつける鉾は大加耶と百済に主に分布する銀装鉾（朴 1999）が挙げられる。銀装鉾の最も古いものは大加耶の玉田Ｍ１号墳例（TK216 ～ ON46 型式期）であり（鈴木 2012）、おじょか古墳の錫装鉾についても、その時期以降の大加耶・百済系のものと評価できる。

５　鏃

腸抉柳葉形と圭頭形の中に頸部が極端に長いものが含まれており、長頸鏃の出現期、鈴木一有のⅢ期（TK216 ～ ON46 型式期）に相当する（鈴木 2003）。腸抉柳葉形の一部とナデ関柳葉形は頸部がそれほど長くなく、後続する段階のものである可能性がある。

６　短甲

小型鋲を利用した短甲は、滝沢誠の分類のＩａ式かＩｂ式にあたる。Ｉａ式は TK73 型式期、Ｉｂ類は TK73 ～ TK216 型式期に対応するとされる（滝沢 1991）。

７　斧

有肩鉄斧（95）は袋部と刃部を別に作り、鍛接して作成された可能性がある。形態的には異なる点はあるが、袋部の閉じ合わせが肉眼では確認できないという特徴からも野島永のⅢ式有肩鉄斧に相当すると考えられる。Ⅲ式有肩鉄斧は５世紀代に普及し、北部九州を中心にして瀬戸内沿岸の比較的狭い地域に偏在して確認されている（野島 1995）。

８　鎌

先端部のみが屈曲する曲刃鎌は古墳時代中期以降に認められるものである（魚津 2003）。

９　刀子

両関の刀子は、TK208 型式期に急速に普及することが知られている（魚津 2000、渡邊 2010）ことから、それ以降のものと考えられる。

10　鉤状鉄製品

石室の石材の間に挟み込んで使用する鉤状鉄製品は、日本列島では古墳時代中期から少数認められる。福井県・向山１号墳はおじょか古墳と同様、九州系の横穴式石室であり注目される。更に、大加耶の玉田古墳群では５世紀前半以降に類似の遺物が多数見つかっている（右島 2011）。おじょか古墳の例は他の例よりも華奢であり同一遺物と認識し得るかどうか疑問は残るが、おじょか古墳の石室には突起状石材が認められる（土生田 1980）ことから、両者の併用という視点からも検討が必要である。

11　埴製枕

埴製枕は特徴的であるが、類例が乏しい。形態は異なるが、他に４点出土しており、いずれも近畿地方に分布する（中村ほか 1992）。ただし、その形態はそれぞれ異なっている。

12　玉

多様な玉が出土しているが、比較的後出のものとして黄色の小玉と鋳型法により作られた小玉が挙げられる。これらの玉は TK216 型式期以降に認められるとされる（大賀 2002）。

13　埴輪

埴輪については TK23 ～ MT15 型式期に位置付けられるものが含まれている（豊田 2001）が、破片資料には複数種のものが混ざるようであり、時期が定めがたい。

14　須恵器

墳丘裾から出土したとされる須恵器が報告されており、陶邑の TK73 型式、猿投の H-111 号窯に近い特徴があるとされる（中村 1992）。H-111 号窯は TK216 型式期に併行するとされる（斉藤 1983）。

15　石室

これまで最も研究されてきたのが石室であり、九州の様々な石室との関係が論じられている。それらの古墳は釜塚古墳・ヤンボシ塚古墳が前方後円墳集成編年第６期、目達原大塚古墳が第７期、関行丸古墳が第８期に位置付けられる（重藤 2012・2015）。

第３節　おじょか古墳の年代と系統

１　おじょか古墳の築造年代

以上のような遺物の特徴からおじょか古墳の築造年代について考えたい。存続時期が比較的絞りこめる遺物として、鏃、短甲、刀子が挙げられる。鏃は TK216 ～ ON46 型式期、短甲は TK73 ～ 216 型式期、刀子は TK208 型式期以降となる。

副葬される武器には保管や所有の期間が想定される（川畑 2015）ことやおじょか古墳が横穴式石室であり追葬の可能性もあることから年代を確定することは困難であるが、おじょか古墳の築造年代は概ね ON46（TK208 古段階）型式期から TK208 型式期と推定される。この年代は鉾、墳丘出土の須恵器など多くの遺物の年代とも矛盾しない。また、九州の石室の変遷観とも整合的である。ただし、埴輪の年代とは整合しておらず、問題を残している。

２　おじょか古墳の系統

では、おじょか古墳にはどのような地域の影響が認められるだろうか。

最も重要なのは石室であろう。有明海北東部からの影響が想定される石室は、その地域の石室造りの工人が訪れなくては製作は困難である。九州との密接な関わりがあったのは間違いない。その他に九州との関わりを示すものとして、方格Ｔ字鏡、有肩鉄斧が挙げられる。

更に遠方の朝鮮半島南部との関わりが想定される遺物として、錫装鉾と鉤状鉄製品がある。大加耶を中心とした地域に系譜が求められそうであるが、そのつながりが直接的であったか、九州をはじめとした日本列島を経由したものかは定かではない。

一方、近畿中央部との関係を示すものとして、短甲、埴製枕が挙げられる。ただし、短甲については近畿中央部のみに生産が限定されない可能性が示されている（松木 2014）。

特徴的な遺物として半球形飾金具がある。類例が少ないが、現状では近畿中央部を中心とした分布を示さない。

一般的な武器については、近畿中央部だけでなく地方生産も行われていたと考えられる（橋本 2015）ため、その系統は明らかでない。

以上の内容から、おじょか古墳には九州の影響が

強く、加えて近畿中央部、朝鮮半島南部との関わりも認められる。

第４節　おじょか古墳が造られた時代と出現の意義

１　おじょか古墳が造られた時代

以上のように、おじょか古墳は古墳時代中期のON46 ～ TK208 型式期に築造された可能性が高い。古墳時代中期は、中国史書の記述から、倭の五王が繰り返し中国南朝に朝貢を行った時代であったことが知られる。讃・珍・済・興・武の５人の倭王がそれぞれ『日本書紀』のどの大王に該当するかについては諸説あり定まっていないが、日本列島における古墳のうち、その時代の最大規模のものが古市・百舌鳥古墳群に築かれることから、それらの古墳に葬られた近畿中央部勢力（倭王権）の首長が倭の五王に相当すると考えられている。

ON46 型式期は百舌鳥古墳群に最長の前方後円墳である大山古墳が築かれた時代にあたる。古墳の築造の全国的な動向としては、墳丘体積が前方後円墳集成編年第５期にピークを迎え､第８期に激減する。また、近畿中央部の古墳が占める割合は、古墳時代初頭は高いが、第４期まで減少し、その後第７期にピークを迎えるまで増加する（新納 2005)。第８期に古墳築造にかける労力が減じるまでのあり方は、各地の勢力が前方後円墳という同じフォーマットに則って大きさや壮麗さを競合した結果として捉えることができる（辻田 2012)。そうした視点からみると、大山古墳が築かれた第７期は、古墳築造に多大な労力を投下した最後の時代であり、古墳築造競争において倭王権が他の勢力を圧倒するのに成功した（松木 2015）時代と捉えられる。

更に、古墳に副葬される副葬品に目を向けると、銅鏡、腕輪形石製品、鉄製武器・武具へと順次入れ替わりながらも集めたものの多寡によって格差を表現する「量的格差表象システム」が、同一品目の質的な違いによって格差を表現する「質的格差表象システム」へと移行していくが、前者が古墳の築造競争と結びつくとの考えがある（川畑 2015)。第８期における築造競争と多量副葬の衰退には倭王権の伸長が関わったと考えられるが、この時期は倭の五王の「武」に比定される雄略朝期に相当すると考えられている。

高田貫太は倭と朝鮮半島諸国との交渉関係をまとめ、雄略朝期以降に倭王権が対外交渉権の掌握に乗り出し、それ以前は各地域社会が主体的に交渉を行ったことを示した（高田 2014)。東海地方においても中小首長が倭王権を介さずに遠隔地と交流を行ったことが示されている（岩原 2012)。

２　おじょか古墳出現の意義

おじょか古墳が造られた時代は、倭王権が力を付けながらも、政治的には周辺各地を統率するには至らなかった時代と評価することができるであろう。近畿中央部よりも、九州との関わりを強く見出し得るおじょか古墳はそうした社会情勢を背景としてはじめて理解できる。

突如として志摩地域に現れるおじょか古墳の被葬者は、九州をはじめ各地と交流を持った人物が想定できる。おじょか古墳は志摩半島の先端部に位置しており、北へ約 20km 進むと、菅島、答志島がある。この地点はそのまま伊勢湾西岸を北上し、伊勢、尾張に向かうルートと、菅島、答志島周辺から神島を通り、三河以東に向かうルートの分岐にあたる。その少し手前の全ての船が通過する地点におじょか古墳は位置しているということができる。志摩地域に他に目立った古墳が確認されていないことは、おじょか古墳の被葬者が古墳周辺に限定されない、広域の海上交通を差配する人物であったことを想起させる。

おじょか古墳が造られた志島周辺には７世紀前半まで有力者の古墳が築造され続ける。更には遠からぬ場所に国分寺、国府も置かれたと考えられる。そう考えると、おじょか古墳の出現は後の志摩国の成立にも関わる地域性の発現ともいうことができるかもしれない。

参考文献

池淵俊一 1993「鉄製武器に関する一考察―古墳時代前半期の刀剣類を中心として―」『古代文化研究』１、島根県古代文化センター
伊藤保 1966「王女丘古墳とその出土品について」『郷土志摩』34、志摩郷土会
岩原剛 2012「東海」『古墳時代研究の現状と課題』上、同成社
魚津知克 2000「鉄製農工具副葬についての試論」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会
魚津知克 2003「曲刃鎌とＵ字形鍬鋤先―「農具の画期」の再検討―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11
臼杵勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』１、ＰＨＡＬＡＮＸ―古墳文化研究会―
大賀克彦 2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町教育委員会
河野法子 1982「石障系古墳の一考察」『肥後考古』2、肥後考古学会
川畑純 2010「古墳副葬矢鏃の生産・流通・保有・副葬」『古代学研究』185、古代学研究会
川畑純 2015『武具が語る古代史―古墳時代社会の構造転換―』京都大学学術出版会
車崎正彦 2002「三国鏡･三角縁神獣鏡」『考古資料大観』5、小学館
皇學館大学考古学研究会 2002『志摩国の古墳』
小玉道明・下村登良男・村上喜雄 1968『志摩・おじょか古墳発掘調査概要』阿児町教育委員会
斉藤孝正 1983「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集』史学 29
齋藤努 2001「日本の銭貨の鉛同位体比分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』86
坂口英毅編 2010『兵庫県立考古博物館研究紀要』3
澤田むつ代 2000「古墳出土の鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻き―織物などの種類と仕様―」『MUSEUM』617、中央公論事業出版
重藤輝行 2012「北部九州」『古墳時代の考古学』2、同成社
重藤輝行 2015「九州」『季刊考古学』別冊 22、雄山閣
杉井健・上野祥史編 2012『国立歴史民俗博物館研究報告』173
鈴木一有 2003「中期古墳における副葬族の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11
鈴木一有 2005「東海の甲冑出土古墳にみる古墳時代中期の変革過程」『三重県埋蔵文化財調査報告 259　天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』三重県埋蔵文化財センター
鈴木一有 2012「武器類の評価」『国立歴史民俗博物館研究報告』173
鈴木敏雄 1936『三重県志摩郡志島村考古誌考』
高田貫太 2014『古墳時代の日朝関係―新羅・百済・大加耶と倭の交渉史―』吉川弘文館
高橋克壽・永江寿夫編 2015『向山１号墳発掘調査報告書』福井県若狭町
竹内英昭 2008「伊勢湾地域の横穴式石室の構造と展開」『季刊考古学』別冊 16、雄山閣
辻田淳一郎 2012「古墳文化の多元性と一元性」『古墳時代の考古学』7、同成社
徳田誠志 1992「第Ⅴ章２－Ｂ　鏡」『紀伊半島の文化史的研究―考古学編―』関西大学文学部考古学研究室
豊島直博 2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房
豊田祥三 2001「伊勢における円筒埴輪の生産と展開」『研究紀要』10、三重県埋蔵文化財センター
中村弘 1992「第Ｘ章７　おじょか古墳の検討」『紀伊半島の文化史的研究―考古学編―』関西大学文学部考古学研究室
中村弘・米田文孝・十河良和・白澤崇・徳田誠志・露口真広 1992「第Ⅳ章８－Ａおじょか古墳の調査」『紀伊半島の文化史的研究―考古学編―』関西大学文学部考古学研究室
新納泉 2005「経済モデルからみた前方後円墳の分布」『考古学研究』52-1、考古学研究会
野島永 1995「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」『考古学研究』41-4、考古学研究会
朴天秀 1999「装飾鉄鉾の性格とその地域性」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
橋本達也 2015「古墳時代中期の武器・武具生産」『季刊考古学』別冊 22、雄山閣
服部哲也 1993「東海地方」『季刊考古学』45、雄山閣
土生田純之 1980「突起をもつ横穴式石室の系譜―本州における事例の検討―」『考古学雑誌』66-3
深谷淳 2015『尾張の大型古墳群　国史跡志段味古墳群の実像』名古屋市教育委員会・六一書房
藤井康隆 2009「東海地方の「九州系」横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店
古城史雄 2009「肥後の横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店
前原豊・伊藤良・戸所慎策編 1993『前二子古墳』前橋市教育委員会
松浦宥一郎 1994「日本出土の方格Ｔ字鏡」『東京国立博物館紀要』29
松木武彦 2014「国家形成と軍事」『古墳時代の考古学』9、同成社
松木武彦 2015「前方後円墳の巨大性―日本列島の墳墓はなぜ大きいのか？―」『季刊考古学』別冊 22、雄山閣
馬淵久夫･平尾良光 1982「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』68-1
馬淵久夫・平尾良光 1983「鉛同位体比による漢式鏡の研究(二)」『MUSEUM』382
馬淵久夫・平尾良光 1987「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比―青銅器との関連を中心に―」『考古学雑誌』73-2
右島和夫 2011「横穴式石室の鉤状鉄製品」『古文化談叢』65-4、九州古文化研究会
森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』74-6、史学研究会
森下浩行 1987「九州型横穴式石室考―畿内型出現前・横穴式石室の様相―」『古代学研究』115、古代学研究会
柳沢一男 1980「肥後型横穴式石室考―初期横穴式石室の系譜―」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
柳沢一男 1982「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
柳沢一男 1993「横穴式石室の導入と系譜」『季刊考古学』45、雄山閣
柳沢一男 2005「横穴式石室の成立と普及」『日本の考古学』下、学生社
山本達也 2002「泊り古墳石室構造の復元と出土遺物について」『志摩国の古墳』皇學館大学考古学研究会
米田文孝編 1992『紀伊半島の文化史的研究―考古学編―』関西大学文学部考古学研究室
渡邊可奈子 2010「畿内における古墳時代の刀子」『古代学研究』185、古代学研究会

方格Ｔ字鏡（１）①

方格Ｔ字鏡（１）②

写真図版２

方格Ｔ字鏡（１）Ｘ線写真

珠文鏡（２）①

刀（６）の茎部

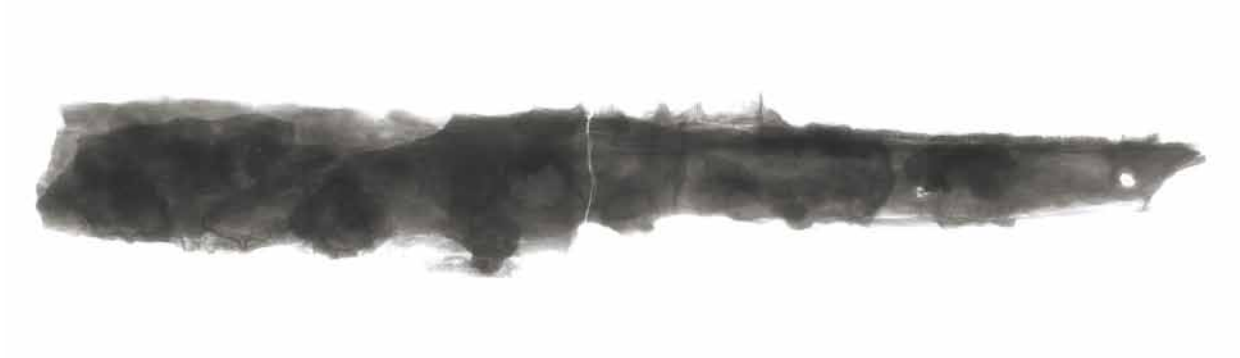
刀（11）の茎部

珠文鏡（２）②

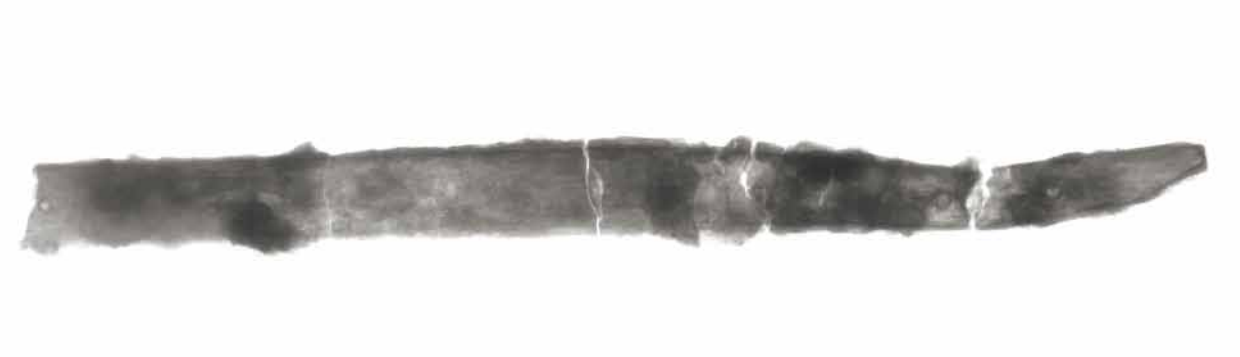
半球形飾金具

半球形飾金具（３）Ｘ線写真

半球形飾金具（４）Ｘ線写真



刀（６）Ｘ線写真



刀（10）Ｘ線写真

写真図版４

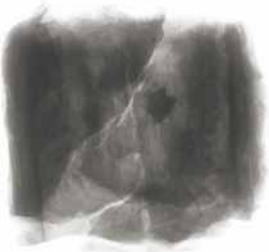
刀・剣

刀・槍

写真図版６

刀（16）の茎部

剣（20）の茎部

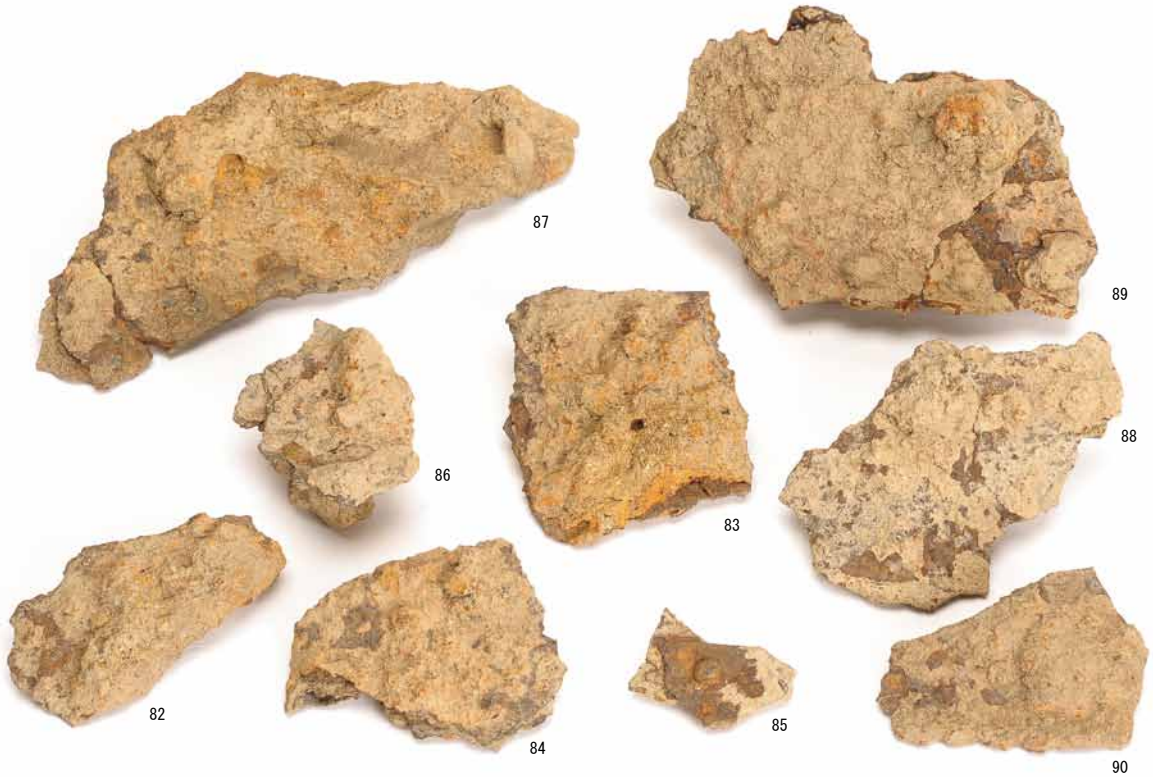


鉾（25）の錫装具細沈線

斧（95）Ｘ線写真

鉾（25）Ｘ線写真

鉾（25）



短甲

写真図版８

27
28
29
30
31
32
35
33
49
26
52
40
50
41
42
43
44
45
46
47
48
55
56
69
57
58
59
60
67
70

鏃

斧

鎌・刀子・不明鉄製品・鉤状鉄製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	おじょかこふん（しじまこふんぐん11ごうふん）はっくつちょうさほうこく
書名	おじょか古墳（志島古墳群11号墳）発掘調査報告
副書名	金属製品編
シリーズ名	志摩市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	4
編著者名	三好元樹（編）、齋藤努、川本耕三
編集機関	志摩市教育委員会
所在地	〒 517-0592　三重県志摩市阿児町鵜方3098番地22　TEL0599-44-0339
発行年月日	2016年３月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おじょか古墳 （志島古墳群 11号墳）	志摩市阿児町 志島	215	d39	34° 18′ 39.8″	136° 53′ 20.1″	19670720 ～ 19670804		記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おじょか古墳 （志島古墳群 11号墳）	古墳	古墳中期	横穴式石室１	鏡、半球形飾金具、刀、剣、槍、鉾、鏃、短甲、斧、鎌、刀子、鉤状鉄製品	出土遺物のうち、金属製品について報告。

要約	昭和 42(1967)年に発掘調査を行い、平成 22 ～ 24 年度に保存処理を行った金属製品について報告した。九州に分布の中心がある方格Ｔ字鏡、類例の少ない半球形飾金具、朝鮮半島南部との関わりが想定される錫装矛、鉤状鉄製品が確認された。また、豊富な武器、武具、農工具を持つ。遺物から古墳の築造は古墳時代中期中葉から後葉の 0N46（TK208 古段階）型式期から TK208 型式期と考えられ、九州の影響が強く、近畿中央部、朝鮮半島南部との関わりも認められる。被葬者は志摩地域の海上交通を差配したと考えられ、後続する古墳群の形成に重要な役割を果たしたと考えられる。

志摩市埋蔵文化財調査報告4

おじょか古墳（志島古墳群１１号墳）

発掘調査報告

2016年 3月28日

編集・発行　志摩市教育委員会

印刷　東山印刷